

清明講座聽講員募集

講目 師目 會場

法華經(方便品以下)
小林一郎先生

洗足池畔 清明文庫

省線五反田驛ニテ池上電車ニ乗換同線洗足池驛下
車北方約二丁
省線大井町驛ニテ日黒澤田電車ニ乗換同線洗足公
園驛下車南方約三丁
省線日黒驛ニテ日黒澤田電車ニ乗換同線洗足驛下
車南方約五丁

每週日曜日午後二時ヨリ二時間

三月十三日開講十二月講了

每月分納金壹圓一時前納金六圓

日期時

聽講料
聽講希望者ハ氏名住所及職業ヲ記入セル書面ヲ以テ
本會事務所ニ申込マシ
常任理事宮原六郎君昨年八月以來病氣療養中ノ處頃
日全快ニ付從前通り會務ヲ執行セラルベシ

昭和七年三月一日

東京府馬込町南千束一五九番地
電話 在原 三八三九番
振替口座東京四四七六六番

財團法人 清明會

價定一統	
一ヶ年	金貳拾錢
半ヶ年	金壹圓貳拾錢
送料共	送料共
送料共	送料共
事之金前	事之金前

料告廣一統	
表紙一頁	金貳拾錢
一頁	金拾錢
半頁	金五錢
四分一頁	金九錢
五頁	金九圓
事之金前	事之金前

昭和七年二月廿四日印刷納本 (第四百四十四號)
昭和七年三月一日發行

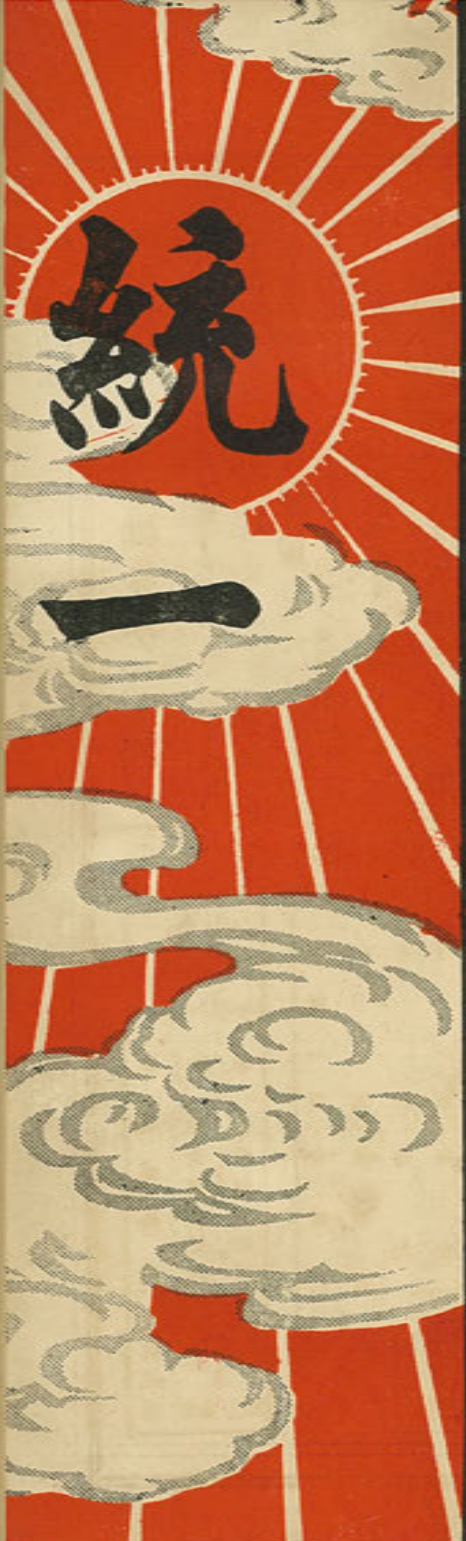
神奈川縣橫濱市磯子區磯子町廣地一四八
編輯兼發行人 磯部滿事
印刷所 東京府在原郡品川町南品川百八十一番地 鈴木日雄
印刷所 東京都 印刷所 電話高輪六〇二四番

發行所 統一發行所
編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ
東京府在原郡品川町南品川四百十二番地
振替東京五一〇七一番

目次

如大雲起
聖訓摘要……………聖應院日生上人
王法と佛法(下)……………小林一郎
開顯統一と日生上人(乾)……………中村清一
日生上人を憶ふ(其七)
併而第一周忌報恩奉悼會
記 事
○統一團協贊會々々報
○教戰
○誌料領收

號月四年七十三第



如大雲起

嵐毗尼園ノ華花咲匂ヒ、淨水微温ム卯月八日、人界ニ其ノ妙相ヲ現ジ、一指天ヲ指シ一指地ヲ指シ「天上天下唯我獨尊、我ハ汝等ヲ救ハンガ爲ニ世ニ出現ス」ト宣ベ給ヒシ 大聖釋迦牟尼ノ御降誕コソ、實ニ碧空ニ大雲ノ起リシ如クナリ。之ヲ經ニ云ク「我ハ爲レ兩足ノ尊ナリ世間ニ出ルコト猶大雲ノ如シ 一切ノ枯稿ノ衆生ヲ充潤シテ皆苦ヲ離レテ 安穩ノ樂 世間ノ樂 及ビ涅槃ノ樂ヲ得セシム」ト。

唯我一人能爲救護ノ 本佛釋尊ハ 普ク貴賤上下、正見邪見、利根鈍根ニ平等ニ甘露ノ淨法ヲ雨シテ快ク善利ヲ得セシメ給フ。

今ノ人多ク口腹本能苦ニ惱ム。而カモ釋尊ノ慈雨、人生ノ八苦、無明ヲ消除シ、眞ノ平和安穩ノ淨樂、社會ノ共榮、進ンデ將來永遠ノ生命ヲ復活ス、彼ノ片々タル無撻取ノ共產社會出現ヲ、最大理想トセル如キ低迷妄見ニ非ラザルナリ、非ラザルナリ。

我等愚痴 狹劣 羸瘦ニシテ弊欲ニ著セル窮子ハ、途ニ獨リ世尊ニ觸レテノミ眞ニ啓發セラレン。ア、歎シイ哉 釋尊ノ出世、喜シイ哉 釋尊ニ竹遇シ奉ラン事ヨ。

「世尊ハ大恩マシマス希有ノ事ヲ以テ憐愍シ教化シテ我等ヲ利益シタマフ 無量億劫ニモ護カ能ク報ズル者アラン 手足ヲ以テ供給シ頭頂ヲモツテ禮敬シ 一切ヲモツテ供養ストモ皆報ズルコト能ハジ」嗟 報ジ難キノ大恩高德、至心行ズベキハ夫レ「誠信」ノミ矣

南無妙法蓮華經

聖訓摘要

聖應院日生上人

南條殿御返事

それから次は南條殿御返事でありますが、この中に大橋太郎の話が出て居ります、これはよく意味合を了解して置く必要があると思ふ、その中の大切な點を讀んでその話の大意を御紹介致します。

大將殿をほせありけるは法華經の御事は昔よりさる御事とはききつたへたれども、丸は身にありてニツのゆへあり、一には故親父の御くび(頸)を大上(政)入道に切ラレてあさましというばかりなかりしに、いかなる神佛にか申すべきとをいしに走湯山の妙法尼より法華經をよみつたへ千部と申せし時、たかを(高峯)のもんがく(文豊)房をやのくびをもち來てみせたりし上、かたきを打ツのみならず、日本國の武士の大將ヲ給てあり、これひとへに法華經の御利生なり。ニツにはこのちごがをやをたすけぬる事不思議なり。大橋の大郎というやつは頼朝きくわい(資隆)なりとをもう、たとひ勅宣なりともかへ(返)し申してくびをきりてん、あまりのにくさ(憎)にこそ十二年まで、土のろう(牢)には入てありつるにかゝる不思議あり。されば法華經ト申ス事はありがたき事なり。頼朝は武士の大將にて多

のつみ(男)をつもりてあれども、法華經を信(ま)まいらせて候(ま)へばさりとともこそをもへどなみだ
(漢)ぐみ給(たま)けり。(編輯遺文錄) (一四三八)

これは有名な大橋太郎のことを書かれたあとの結び目の所です、全文は長いから大事の所を摘出したのですが、日蓮聖人の書かれた順序は、筑紫に大橋太郎といふ武士があつて、頼朝と戦をして敗れた、これはどちらかといふと平家の方である、所がその大橋太郎は生捕りになつて鎌倉に引かれて行く時分に、その奥さんは妊娠をして居られて、この胎中の子供が若しも男の子であつたならばどうしませうといふことを聞かれた、所が「どうすると云つた所がもう自分は生捕りになつて行くものであるからどうすることも出来ないから、出家をさせて、さうして親の菩提でも弔はすより仕方あるまい」といふことを大橋太郎が言ひ残して行つたのであります。所がその生れた子供は果して男子であつて、父の言ふ通りお寺に遣つてさうして法華經を誦しました、所がその子供は非常に惻愍な子供であり、恰度十二になりまして、もう法華經を殆ど暗で誦むほどになつて、熱心に法華經を誦んで居つた、所が友達がお前は父無子ぢや、お母さん一人しかない、お父さん無しで出来た子でをかしい、斯ういふことを言うて人の悪口を言ふた、そこでその子供がお母さんの所に歸つて来て、「私はもうお寺には歸らない、お寺の小僧さん仲間でお前は父無子だ」と云ふて私を馬鹿にするからして私は歸らぬ」と云つたものであるから、母は父のことを語れば子供が歎き悲しむであらうと思つて今まで言はぬで居つたけれども、あまり父無子

と言はれるのも残念であらうからと云ふので、遂に始終を明かして「お前は父無子では無い、おぬしの父は名高い名門の子で大橋太郎といふ歴とした武士である、斯ういふ譯で頼朝と戦つて、戦利あらすして今は鎌倉に引立てられ、土の牢に入れられて居るといふことぢやが、既に首を刎ねられてお死になつたか、それともまだ牢屋に引かれてお出になるか、指折り算へればお前はまだお胎の中に居る時分で、今から十二年前の事である」といふことを話した、さうして「これはお前にといふことで言傳かつた懐剣である」といふので短刀を子供に渡して、いろ／＼父の話を母がして聴かすものだから、急にお父さんに會ひたくなつて、お父さんが土の牢の中に生きてお出になるならばどうかして一遍お目に懸りたいものだといふので、母親の許しをも聴かすして、その小さな子供が遙々九州から草鞋を穿いて、遠い所の相州鎌倉までやつて来たのである、今ならば汽車だから難作ないけれども、昔の旅として草鞋を穿いて子供が鎌倉まで来るのは容易の事ではなかつたけれども、父を思ふ一念で鎌倉に着いた、どうして尋ねるといふ目當もないから、先づ鎌倉の八幡宮の社前に行つて一心に法華經を誦んだ、八幡様は法華經が好きだといふことを聞いて居る、昔傳教大師が法華經をお誦みになつた時分は功験顯かであつた、どうぞ私が一心に法華經を誦みますから父に會はして貰ひたいものだといふことで、この子供が一生懸命に法華經を全部、一の巻から八の巻の終りに至るまで精神籠めて誦んだのであります、所がこの子供がその精神を籠めたからでもありません、聲の美しいのとお經に熱して居る、可愛い十二の

子供が法華經の一巻序品第一から始めて順々に誦んで行くものだから、そこに參詣した者が、こんな小さい子供が法華經を一の巻から順々に誦んで居る、これはえらい子ぢやといふて、聲も美しいしから參詣した者が皆聽惚れて居つたのである、その中に右大將頼朝の奥さんがやはり修行で參詣せられた、所がその可愛い子供の聲がするものだから、同じやうに大勢の人の中に居て聽いて居られた、多くの人も大抵は歸らないで、感心な者ぢやといふて皆聽いて居る、やがて一部も滞りなく終ひまで誦んだ、さうして一生懸命に口の中で何か願ひ事をして居る、だん／＼日も暮れかけて來た、それで右大將の奥さんが傍に寄つて「お前は何處の子ぢや」といふと「私は筑紫といふ遠い處から來たものです」鎌倉に知合があるか」といふと「誰も知つた者はない」といふ「今夜はどうする積りか」と聞くと「今夜はこの社殿で寝て明日また夜が明けたら精神籠めて法華經を誦む積りである」と言ふものであるからして、奥さんも可哀想になつて來て「この社殿で寝るといふことはそれは可哀想だ、マア／＼妾の家へ來るが宜い」といふのでその子供を右大將の館に連れて歸つた。さうすると翌朝になるともう法華經を誦み始めた、まだ右大將の奥さんなどは寝て居る時分に、子供は顔を洗つて法華經を誦み始めた。聲が美しいものであるから感心して居られる、毎日々々さうやつて、さうして何と云つても他の事はちつともやらない、一心に法華經を讀誦して居ると、或る日窓の外が非常に騒がしく、軍馬の聲が聞える、それで子供が「今日はどうして外があんなに騒いで居るか」といふことを右大將の奥さんに聞いたので、右大將の奥さん

がその事を傍の者に聞かれると「今日は長らく土の牢に入れてあつた筑紫の大橋太郎が龍の口に引出されて首を斬られるのぢや、その見物のために大勢の者が騒いで居るので、今丁度大橋太郎が馬に乗せられて龍の口に引かれた所ぢや」といふことであつた、それで奥さんが子供に「あれは大橋が首を斬られるので騒がしいのぢや」と告げられた、奥さんは大橋太郎の事を何も知らないから大橋太郎が首を斬られるためぢやと言ふた、そこでその子供が「ア、お父さんが首を斬られに行かれるのか」と言つてウツと泣き出した、「今日まで法華經を誦んで居るのはお父さんに會ひたいと思ふからである、どうか會はして下さい」と云ふて十二の子供が聲を揚げて泣いたものだから、右大將の奥さんも堪らなくなつて、これは大橋太郎の子であつたかといふて、それから頼朝の處へお出でになつて「貴郎もお聞きであつたらうが、あの可愛い子のお父さんは大橋太郎である、今首を斬られる所であるからどうぞ助けてやつて下さい」と言つた。所が頼朝は「彼奴ばかりは何と云つても助けることは出來ぬ」と云つて助けると言はない、けれども奥さんは精神を籠めて願はれた、どういふ風に頼まれたかその言葉は詳しくないけれども、よほど力強くお願ひになつたものと見えて、頼朝も遂に我を折つて「お前がさう言ふならば助けてやらう」といふことになつた。それから梶原を呼んで「大橋太郎の首を斬られて居れば仕方ないけれども、まだ斬らずにあるならば繩の附いて居る儘で此處に引き來れ」といふことを命じた、梶原が驅け付けて見ると丁度首を斬られる所であつたけれどもまだ首を斬られずに其處に坐つて居つたのであ

る、もう人橋太郎は首を斬られると覺悟して居るから、後ろ手に縛られたまゝ、目を瞑つて、どんな騒
 があつても知らざる儘に、身體を落つてテツと觀念して居つたのである、梶原が行つてその綱のまゝ
 引立て、さうして又馬に乗せたけれども、何故に馬に乗せられたかも知らないで、たゞ乗せられた儘
 馬に乗つて、右大將の館に來たのである。さうして庭前に引据ゑられた、それに右大將が出て、その小
 さな子供にその繩を解かしたのである、解かれても大橋太郎は觀念してしまつて居るからテツとして居
 る。そこで子供が繩を解いてから「お父さん」と呼んで「私はあなたの子です」というて傍で膝を
 叩いて言ふものだから、初めて大橋太郎は目を開けて見た、「子とはどういふ譯か」と聞くと「私は筑紫
 から遙々お父さんを尋ねて來た斯々云ふ者です」といふので大橋太郎は驚いて「ア、それでは自分が筑
 紫を立つ時分に懐妊して居つた子であつたか」といふことで、懐妊をその證據に見せたから、これは成
 程自分の奥へた短刀に相違ないと非常によろこんで、どうして自分が繩を解かれたかといふことになつ
 て、斯々で法華經を誦んだ功德に依つて許されたといふことの話があつた時に、頼朝のいふ言葉が今
 讀んだ言葉なのである、頼朝が出て來てこれを言ふ、どういふ事を言つたか「大將殿をほせありけるは」
 右大將頼朝がその時に言ふには、どうも法華經といふお経は不思議なお経だ、昔から御利益の顯たかな
 お経といふことは聞いて居つたけれども、自分の身について實驗した事が二ツある、それは一ツは自分
 のお父さんが平家の爲めに敗られて、さうして清盛入道の爲めに首を斬られたのであるが、實に其時は

残念であつて、切めてはお父さんの首でも見たいものだと思つて居つた、所がどうしても之には
 神佛を願ふより外仕方がないと思つたが、その時に伊豆の方に住んで居る所の妙法尼からして、法華經
 一千部を誦んで御祈念したといふ知らせを見た時に、高雄の文覺上人が父の首を携へて來て自分に見せ
 て呉れた、妙法尼が法華經一千部を誦んで呉れた功德に依つて父の首が自分の手に入つたかと思つた、
 そればかりではない、有難いものだから後自分は法華經を毎日々々誦んで居るが、その御利益
 の爲めに遂に平家を討ち滅ぼすことが出來た。さうして日本の武士の大將となつて、所謂總追捕使に任
 ぜられて、鎌倉に幕府を開くまでになつた譯である、これは偏へに法華經の御利益である、平家を打敗
 ることも出來た、自分は伊豆の方に親と共に落延びて百姓家に隠れて居つたものであるけれども、遂に
 は天下を取返すことも出來たのである。二ツは今度の今日の事である、これは實に不思議なことで、大
 橋太郎といふ奴は自分はあるにないと思つて、假令勅宣でも、天子の詔があつてもこれは救さ
 れぬ積りで居つた、餘りに憎いものであるから十二年の間土の牢に入れて苦しめた上で殺さう、もう宜か
 らうといふので今日は殺すことにしたのである、それが子供の法華經を誦む事よりして自分の妻が感心
 をして、自分に一生懸命頼むものだから、他の者が頼むのならばとても肯くのではないけれども、外な
 らぬ自分の妻が命に代へて頼むこと故に遂に肯いたのである、如何にも法華經は有難い御利益のあるお
 経だと云つて「涙ぐみ給へり」頼朝が涙を流して法華經の事に感激したといふことが書いてある、左様

にして法華經の爲めに殺さるべき人も助かる、又落魄れてしまつた頼朝が遂に天下を取るに至つたこと
も法華經の御利益だと書いてある、法華經は餘りに御利益があり過ぎて、却つて弊害をなして來たので、
中山のやうな犬が出来たのもこの御利益の濫用である、さういふ詰らない事に狐だ狸だ溝鼠だと云ふや
うなことを言はないで、モツと堂々と此處に頼朝公が言はれるやうに、大いに天下國家の爲めに役立た
した所の御利益を盛んに書けば宜いのちや、詰らないことを言ふものだからしてそこで御利益の應用が
下手になつて來た、婆さんが取ッ置いて居るの、溝鼠が取ッ置いて居るの、鰻鼠が化けたとか云ふもの
だから訝しくなつて行くのちや。それから同じ御書に

日蓮房はむくり（蒙古）國のわたるといへばよろこぶと申すこれゆわれなき事なり。かゝる事あるへし

と申せしかばあだがたき（仇敵）と人ごととせめしが、經文かぎりあれば來りなり、いかにいうともか
なうまじき事なり。失もなくして國をたすけんと申せし者を用ひこそあらざらめ、又法華經の第五ノ

卷をもて日蓮がおもて（蒙）をうちしなり。梵天帝釋を御覽ありき、鎌倉の八幡大菩薩も見させ給ひ

き、いかに今は叶々まじき世にて候へばかゝる山中にも入りぬるなり。（繪道文錄）

私はこの御文章には餘程大切な事があると思ふ、日蓮聖人が蒙古來を豫言せられた爲めに、蒙古が愈
々やつて來た時分に、日蓮一人喜んで居るだらう、蒙古が來る／＼と言つて居つたから、それ見たかど
いふので喜んで居るだらうと人は言ふさうぢやけれども、それは怪しからぬ事である、「これゆわれなき

事なり」日蓮が蒙古來を叫んだのはそんな小さな量見から言ふたのではない、日蓮は小さい名譽の爲め
に言ふたのではない、どうぞ日本國が誤りを取らないやうにと、國を思ふ所の精神からである、「國をた
すけんと申せし」二念より外ないのである。然るに法華經の第五の卷を以て法華經の行者たる日蓮を苦し
めたる罪に依つて、今の日本國はいよ／＼危く相成つて居ると思ふ、といふやうにお書きになりました
が、此蒙古の來たのを喜ぶだらうと云ふのは「ゆわれなき事なり」といふ點が大切な事である、此間中
の新聞や雜誌に、日蓮聖人には國家觀念がなかつたとか朝敵だとか色々なことを書いて居る、いろ／＼
御遺文の意味合をよく了解しないで言ふことでありまして、それは昔々つまらぬ宗旨の人が惡口を言ふ
た糟を今頃書くのでありますが、皆それは嘘な事でありまが、文章の後先を切つて、さうして日蓮聖人
の惡口を言ふのであらう。

灌 佛 會

灌佛のたらしひを廻る衆生哉……………十二里
なか／＼に後住の慈悲や花御堂……………素泉
佛體に甘茶の茶粕勿體なき……………三運

王法と佛法(下)

文學士 小林 一郎

そこでこれを身に行ふといふことはなか／＼一朝一夕に出来ることではない。あらゆる艱難を冒して、いろ／＼の苦しい所、辛い所を忍んで、そこを通つてやつて行くのでなければ出来るものではない。人間の心も身も鍛へられないで出来るものではない。骨を折らずしては何事も出来ない。今晚は女の方も大分居らつしやるから私はお願ひをしたい、子供の時から鍛へ上げるといふことをやらないといけません。金持の子供は大概馬鹿である。こんな事を言ふと、金持のお子さんが居らつしやつたならば腹を立てるかも知れませんが、大概と言つて置いたから、まア自分は例外だと思つて戴きたい。笑、拍手

大概金持の子供は馬鹿である。何故馬鹿であるかといふと、周囲で寄つてたかつて馬鹿にしてしまふ。例へば子供が道で轉ぶ、見て居れば必ず自分で起きます。歩く力のある子供は轉んだ時に起きられる。だから起きるまで待つて居つてやらなければならぬ。尤も二階の階段の上か何かで轉んだならば危ないから、急いで起してやるも宜いが、平な道で轉んだら見て居つてやるが宜い。自分で起きた時に土を拂つてやつて、「いゝ子だ」と言つて褒めてやるならば非常に宜しい。それを多くのお母さんは轉んだ時に直ぐ起してしまふ。尤も面倒臭いからでもありま

せうが、急いで起してしまふ。起すだけで黙つて居ればまだ宜いけれども、「いゝ子だ」と言つて起す、轉んだのが少しもいゝ子なことではない。笑、だから子供の方は「ハ、ア、轉ぶと褒められるナ」と思つてしまふ。笑、飛んでもない話である。それは順序が違ふ。起きてから「いゝ子だ」と褒めなければならぬ。起きない中から「いゝ子だ」と褒めてはいけない。さういふのが大きくなるのだから碌な者が出て来はしない。これは實に困つた問題であります。子供を愛するのではない、子供を賤ふのである。

これは能く私が笑話に人に話しますが、青山に住んで居つた時に、近所に成金だと言つて大きな家に住んで居る人があつた。その女の子が暴れ者で仕様がない。何しろ金持だといふので、下女達の書生が大勢居つて、それがいつも附いて歩いて居る、轉ぶと直ぐ起してやる。だから子供は轉んでも決して自分で起きはしない、手足をバタ／＼やつて居る、

その中に誰か起してやる。その子供が或る時私の家の前で轉んだ、例に依つて起きない、手足をバタ／＼やつて下女を呼んで居る。その時にどうしたか下女がなか／＼来ない。私の家の者が見兼ね、行つて起さうとするから、私が止めた。「まア待つて居れ、自分で起させなければいけない。斯ういふ時に一つ修業をさしてやらう」といふので、見て居つた。すると子供は手足をバタ／＼やつて居つたがどうしても女中が来ないので、一段と聲を張り上げて「早く来ないと自分で起きるよ」と言つた。笑、斯ういふ子供が大きくなるのだから碌な者にはならない。

馬鹿々々しい事を長くお話ししたやうでありますけれども、私は今迄の日本國民が丁度その轉んで起して貰ふやうな教育を受けて居つたと思ふ。これが間違つて居る。一體人間として自分の大事な問題を自分で考へるといふことをいつお互は習つたか。そんな事は少しも教へない、いろ／＼な事を教へたけれ

とも、たゞ智慧を注込んで居る。小學校でも中學校でも大學でも何を教へたか、「お前は人間ナンだから、人間の問題を自分で考へろ」。「お前は日本人だから日本の問題を自分で考へろ、この國はお前の國ぢやないか、この家はお前の家ぢやないか、お前一人がぐづ／＼して居れば國は潰れるぞ、強りしろ」といふことを、本當に打込んだ教育が何處にありますか。(拍手) ありはしない。だから皆フワ／＼になつてしまつた。いゝ加減にいろ／＼の事をたゞフワ／＼と教へた。それは兵役の義務も教へれば、税を納めることも教へた、忠義も教へ、孝行も教へた。けれども懐手をして、鼻唄を歌つて忠義や孝行が出来ぬならば誰でもやる。忠義をするならば死ぬ、忠義をしなければ助かる。孝行をすれば命が無い、親不孝をすれば命が楽だといふ時に、ごつちを執るかといふ、この瀬戸際の所を確り教へ込んで置かなければ何にもなるものではない。(拍手) そこが非常に

大事な問題であつて、今日に於てお互が眼を醒してやらなければならぬといふのはその問題である。或は國の大事に當つて非常に難しい事に出會つた時に、お互が確りと「何をやらなければならぬか」といふことを考へなければいけない。人間は一人で生きて居るものではない、人間といふものは國を造らずしては生きて居られない。この頃の若い人はどうかすると國の事などいふと「國よりも自分の方が大事だ、自分が腹が減つて居るのに、國の爲に盡すことなどは出来ない」と言ふ人がある。これは飛んでもない間違ひである。人間が一人で生きて居るものではない、何處へ行つたつて、どんな野蠻人でも決して一人で生きて居ない、人間は群を成して生きて居る、共に生きるといふことは人間の本性である。人はどうでも俺さへ宜ければといふのは嘘である。決して人間は人はどうでも自分さへといふことは出来ない。生きるといふことは共に生きることである。

ある。決して一人で生きては行かれない。その證據にはあなた方も朝起きた時に人に「お早う」と言ふでせう。何故そんな事を言ふか。朝は早いのはきまつて居る。人に言はないだつて八時頃ならミア早い、七時ならもつと早い、わかり切つて居る。それを道で會つても「お早う」「お早う」と言ふ。その時に一人が「お早う」と言ふのに、こつちが「早いのは當然だ」とでも言へば喧嘩になつてしまふ、こつちが「お早う」と言へば向ふも「お早う」と言ふ。或は「今日あたりはどうもまだお暑うございませすネ」「お暑うございませすネ」と言ふ。「暑いことはきまつて居る」ナンと言ふ者は無い。「良いお天気ですネ」「良いお天気ですネ」。「もう彼岸が近いですネ」「エ、彼岸が近いですネ」。「日が短くなりましたネ」「さうですネ」。「今に十月ですネ」。「もう直きですナ」……：「わかり切つた事ばかり言つて居る。言はなくても九月の次は十月と昔からきまつて居る。秋になれば日

が短くなるのも昔からわかつて居る。それをお互に言ふ。それから夜別れる時には「お休みなさい」「お休みなさい」と言ふでせう。考へれば寝ようが寝まいが自分の勝手だ。けれども「お休みなさい」と言ふのに「俺はまだ寝ないよ」と言ふ人は無い。(笑) 要するに吾々の毎日の會話ナンといふものは、言つても言はなくても宜いことを大概やつて居る。併し能く考へて見ると、そこが人間である。人の人たる所である。朝早い時に一人で早いと思つて居るよりも「お早う」「お早う」と言ひ合ふと、本當に早いやうな気分になる。夜でも「お休みなさい」「お休みなさい」言ふと、一日の仕事が終つて、さうして緩く休めるのだナといふ氣持でよい氣持になる。暑い時に一人で暑いと思つて居るよりも「お暑う」「お暑う」と言ふならば幾らか暑さが我慢し宜いやうな氣がする。苦しい事も一人で苦しむよりも共に苦しむ方が耐へ易い、嬉しい事も一人で喜ぶよりは

人と共に喜びば喜びが大きいといふことが、これが人間の本性であつて、互に習はなくても皆知つて居る事である。それだから人間の話といふものは大體にさういふ風にお互に共通の事を話すものである。この間中のやうに夕立のある時に途中で濡れて何處かの軒の下に駆け込む、「エライ雨でしたナ」困りましたネ」「あなたも濡れましたか」「私も濡れましたヨ」斯う言へばなにか濡れたのが早く乾くやうな氣がする。それを「あなたも濡れましたか、お困りでせう」「いや、別に僕は困らない」など、言へば氣まづいことになつてしまふ。要するに人間が「人はどうでも俺さへ宜ければいゝ」と言ふのは、あまりに世の中が切迫して居るから、ツイそんな事も言つて見るけれども、本當に自分の心の底を叩いて見ると、一人では生きて居られない。嬉しい事も一緒に喜びたい、悲しい事も一緒に悲しみたいといふ本性を有つて居るのである。

この尊い本性が養はれて大きくなつて行けば、一切衆生を救ふ爲に教を説くといふ佛の境界まで行ける。だから佛様の教といふものは決して無理を言つて居るものではない。お互に有つて居るところの、人と共に生きるといふその本性を養つて大きくして行くといふことを教へられるのでありまして、決して佛の教なるものは、一部分の特別の機根の人だけに出來るといふのではない。人間の本性に基いて居るのであるから、皆自分を振返つて見れば誰にでも出來るといふことがわかるのであります。

もつとハツキリわかる事は、この頃不景氣だと言ひながら活動寫眞は大入です。斯う申すと私が始終見に行くやうですけれども、私はあまり見もしませぬ。大入だといふ話であります。(笑)西洋の活動寫眞は喜劇と言つて笑はせるやうなのが多い。日本の活動寫眞は笑ふのは多くなくて、所謂人情物とか言つて泣くのが多い。活動寫眞から歸つた人の噂を

聞くと「どうも面白かつた、思はず泣いてしまつた」と言つて居る。この暑いのに金を拂つて窮屈な思ひをして、暇を潰して、涙を出して喜んで居るといふのは一體どういふ譯であるか、涙を出すだけが目的ならば、自分の家の八畳の座敷に仰向けに轉つて、唐辛でも舐めたら、第一經濟であるし、暇が要らなくて済む。所が唐辛でも満足しない、「明日の晩活動寫眞に伴れて行つてやらう」と言へば、「オーキに有難う」と言ふけれども、「明日の晩唐辛をやらう」と言つても誰も有難がらない。何故であらうか、何故金を使つて暇を潰して、暑苦しい思ひをしながら泣いて喜んで居るか。そこに人間の人間たる所がある。活動寫眞の映畫に現れる人生の悲しい出來事に對して、共に悲んでやるといふことが、自分の心持に満足と與へる。宗教も道徳も何も知らなくても、悲しい事を一緒に悲んでやるといふ時に、この五尺の身、五十年の命を有つて居る自分といふものが、

大きな人生の悲しみといふものと一緒になつて、自分が大きくなり廣くなる。だから何となしに心の底に満足がある。これは文學の方では難しい問題で、昔獨逸のレッシングといふ詩人が論じた悲哀哲學といふものもあります。人間が悲みを何故感ずるかといふ、難しい問題になります。一言で言へばさうである。吾々が小さい自己から解放される。平生は自分といふものと人といふものと區別を立て、居る。所が芝居を見たり活動寫眞を見たりする時には、その舞臺に現れる者と一緒に泣いてやる、そこに自分といふものが大きなものになり、そこに一種の満足がある。小説を読むといふのも同じ事であります。さういふやうな事を考へて見ると、何も宗教だの佛様だのといふことを持出さないでも、普通の人間の生活の中に、小さき自己を離れるといふことの喜びといふものは、現在經驗されて居るのであります。それをモット養つて大きくすれば宜しい。世の中

がだん／＼忙しくなるといふと生活をする爲に時間も澤山要るしいろ／＼するものでありますから、その尊い本性を發揮する暇が無くて、ついで／＼人はどうでも俺さへ宜ければ……といふ考になつて行くけれども、それでは本當に人間が幸福になれない。相争うて、その争ひの結果といふものが決して人間に満足と與へるものでないといふことは、世間のいろ／＼の事實を見れば能くわかる話である。併ながら今の日本の立場から言ふと、たと争はないといふ考だけで立つ譯に行かなくなつて居る。これは悲しむべき事實である。何故かと言ふと、今の世界の國々は何と言つたつて對立して競争を續けて居る國である。世界大戦争が済んで平和々々といふ聲は聞えて居るけれども、誰も本當に平和を望んで居る國は無い。皆お互に他國に負けまいと思つて眼を三角にして睨んで居る。昨年私が歩いて見た時も、何處へ行つても口では平和々々と言つて居る。例へば佛蘭

西へ行つて見ると、佛蘭西人は俺は戦は嫌ひだと言ふ。佛蘭西人を捉へて「あなたは戦が好きですか」と聽いて見ると「飛んでもない、どうもあの世界大戦争で百五十萬の青年の命を失つてしまつた。もう戦などは懲り／＼だ」と言ふ。「さうですか、あなたの國は戦は嫌ひですか」確に嫌ひだ「それでは伺ひますが、あなたの國は獨逸との國境に大變兵隊を固めて戦をする準備して居るやうだが、あれはどういふ譯ですか」と言ふと「いや、佛蘭西の方は戦は嫌ひだ、けれども隣りの獨逸がどうも何かやりさうだから用心の爲に固めて居るのだ」と言ふ。(笑)それから獨逸へ行つて獨逸人に聽いて見る。「あなた方は戦が好きですか」いや、大嫌ひだ、あの戦で借金は多くなり、借金を拂はなければならぬ、もう戦などは懲り／＼だ」と言ふ。「それでは伺ひますが、あなたの國も佛蘭西の國境に大變兵隊を送つて固めて居るではありませんか、」いや、俺の方は嫌ひだけれども、

隣りの佛蘭西で何かやりさうだから……(笑)兩方でもんな事を言つて居る。だから決して平和ではない。口では平和々々と言ふけれども、やる事はチャンと萬一の時を用心してやつて居る。だから何處の國へ行つても、損をして迄も平和を保たうといふ覺悟のある國は無い。この事はお互日本人が餘程考へなければならぬ。口ではいろ／＼に言ふけれども、損をしない程度で平和を望んで居るに過ぎない。これは實に悲しい事實で、人と人との間の關係と國と國との間の關係は同等であるべきものである。本當は國といふものも一つの活きたものであるから、人と人が義理と人情を以て交はると同じやうに、國と國との間も義理と人情で交はるやうになるのが理想である。私共哲學や宗教の事を幾らか習つて居る者は、それを理想として研究して居るのであります。併し悲しい事には今の事實はさう行つて居らない。今日の世界の有様はまだ／＼國と國との關係

といふものが義理人情で結ばれて居ないのであつて、國と國とは利害損得で専らやつて居る。これは悲しむべき事實である。いつ迄もこんな事ではいけません。宗教の力や何かによつてどうしてもだん／＼と改めて行かなければならぬのでありますけれども、何分にも今の所では利害損得で固まつて居る。

それからもう一つ私は露骨に申し上げますが、歐羅巴の人間といふものは、日本人よりは利害損得の勘定が非常に細かい。この事を日本人は考へなければならぬ。日本は今世の中が悪くなつたと言つても、昔から日本人は暢氣に暮した癖が附いて居るから、勘定が細かくない。そこらの店へ行つて晝飯を食つて勘定が一圓八十錢だと言ふ。すると二圓出して「お釣りは要らないよ」と言つて出て来る、大變自分も氣持がよい、人も「あの人は氣前のよい人だ」と言つて居る。けれども獨逸や佛蘭西へ行つて食事

をして、一圓八十錢の所に二圓出して、お釣りを受取らないで歸るといふと、「ハ、ア、彼奴は錢勘定のわからない馬鹿だナ」と言はれる。(笑)それだけ日本人と西洋人は、考が違ふ、日本では「お釣は要らないよ」と言へば氣前がよいと言ふ、西洋ではお釣を取らないのは勘定のわからない奴だと言ふ。これは國民性が違ふのだから仕様がなない。何と言つたつて利害損得の勘定は西洋の者が非常に細かい、それが善いか悪いかは別問題として兎に角事實である。そこで禮儀を守ると言つても損の行く場合には決して禮儀を守らないのであります。これも笑話で、幾たびかお話ししましたが、私が倫敦の町を歩いて居りますと能く人にぶつかる。何しろ倫敦の町は舊い都でありますから随分街路が狭い、その狭い所に人が大變込み合つて、銀座通りどころの騒ぎではない、非常に混雑する。殊に外國人はついウロウロして居るから人にぶつかる。ぶつかるとその相手の人が何か

言ふ、黙つては居ないで必ず何か言ふ。初めは私様子がわからぬから、これはキツト「馬鹿野郎」とか「氣を附けろ」とか言ふのだらうと思つて居つた。所が或る時十七八のお嬢さんとぶつかつた、やはり何とか言ふ、お嬢さんが「馬鹿野郎」と言ふかと思つて思はずギョツとした。だん／＼氣を附けて聽いて見ると馬鹿野郎と言ふのではない、「ソーリー」と言ふ、「ソーリー」といふのは日本語で言ふと「失禮」といふ意味でせう。ぶつかるのと向ふの方で失禮と言ふ。さうわかつて見ると、向ふが失禮と言ふなら、ぶつかつたこつちは尙ほ大失禮だから、それから實は私も考へて「ヴェリー・ソーリー」と言うて別れることにした。それから宿屋へ歸つて聽きました。「少し言葉がわかつて氣が附いて見ると、人にぶつかるのと向ふの人がソーリーと言ふが、どういふ譯だ、宿の女將が言ふのに、「それはその筈ぢやないか、ぶつかるやうな所に身を出して居るのが悪い、

向ふが謝るのが當然だ。(笑)これなら天下は太平です、ぶつかられた方が失禮と言ふから、ぶつかつた方では無論失禮で、喧嘩なしで済んでしまふ。これは善い事を覺えた、一つ日本に歸つてもこの真似をしようと思つて居りました。所が或る時街で自動車しょうと思つて居りました。所が或る時街で自動車が衝突した。その時に「ソーリー」と言ふかと思ふと言はない、どつちも黙つて居る。さうして運轉手が睨みつけて、貴様の方が悪いのだといふやうな顔をして居る。そこでだん／＼考へて見ると、人間のぶつかつた時には失禮と言つてもそれ切りで済むが、自動車のぶつかつた時には失禮と言ふと、自分が悪いことになつて向ふの損害を賠償しなければならぬ、損が行く。損の行く時には謝らない、都合が悪いから黙つて居る。(笑)「成程これだナ」と私は思つた。萬事がその手です。禮儀も作法も損の行かない程度にやるのであつて、禮儀を守つて損が行く時には決して禮儀は守らない、無遠慮にやつて除ける

といふのであります。これが現在の歐羅巴人の共通の氣分であつて、隨つてそれ等の國の間に行はれて居る國際競争といふものは皆それである。損をして迄世界の平和を保たうなどと思つて居る者はありはしない。そこでそれ等の國は互に競争をして、隣りの國に負けまいと思つて居る。併し何と言つても今日の歐羅巴はさううまう行きはしない。この間の五年に亘つての大戦争といふものが、あまりに大きな戦争であつて、人を殺し、品物を費し、金を費したことは非常なものでありまして、なか／＼十年経つた今日でも何處も恢復して居りはしません。佛蘭西などは金がありますから幾らか良いやうであります。亞米利加なども金があります。けれども大體としてはあの五年の戦争の打撃といふものはなか／＼回復し得るものではない。だから事業を起さうといつても事業が起らない。随つて人間の手が餘つてしまふ、所

謂失業問題を起して居る。これはどうも仕方がない、品物を買ふ人が少くて、それも買はないで間に合はして居る。だから品物を拵へる必要がない。その上に學問が進み機械が発達すれば、今まで十人でやつた仕事も五人で出来るやうになり、三人でやつた仕事は一人で出来る。その餘つた人間だけの手が空いてしまふ。事業が今より三倍も多く起れば遊ぶ人は無いが、仕事が起らないで機械が進んだならば、どうしても人間の手が空いてしまふ。そこで何處の國も失業問題で困つて居る。私も随分日本の失業者が多くなるといふことが氣になりましたから、西洋を歩いて居る時に相當氣を付けて調べて見たり、人の話を聞いたりしましたが、どうしたつてやり切れない、仕事が殖えないのだから遊ぶ人間を殖えることは仕様がな。と言つて遊ぶ人間をたゞ遊ばせて置く譯にいかぬ、これを何とかして救はなければならぬ。英吉利などでは御承知のやうに失

業保険といふものが随分完備して居つて、平生少し金を掛けて置けば、失業した時の生活費がちゃんと貰へる。所が失業した時にやる生活費は何處から出すかといふと、國庫から出す、その國庫の金は何處から出すかといふと、働いて居る人の税から出す。だから働いて居る人が税を澤山出して働かない人を食はして居るといふ譯である。これでは結局働かない人が殖えて来れば共倒れになるより仕様がな。その點で英吉利の労働黨の内閣は失敗した。そこで内閣が辭職したのでありますが、保險の制度のやり方が下手であつた、失業者に金をやり過ぎて立行かなくなつたのであります。私が倫敦に居つた時に失業の問題を研究して居る人に調べて貰つたり、かなり詳しいいろいろの統計なども見ましたが、一番多く失業手当を買つて居る人は、その時分に二十八磅取つて居りました。二百八十圓です。失業者が月に二百八十圓貰つて居るのだから大したものである。

早く英吉利に行つて失業者になりたいナと言つた人がある。勿論さういふ人ばかりではないが、一番多い人が一家族九人で二百八十圓取つて居る。私の泊つたホテルの直き向ふに住んで居つた。私はその人に會つて「あなたは仕事を探しませぬか」と尋ねた所が「エー探しませぬ、この頃なか〜二百八十圓の仕事はありませぬ」と言つて居りました。さうでせう、仕事を探せば収入が減るのだから探しつことはない、さうして八月になると家族を伴つて海岸へ避暑に行つてしまつた。失業者が避暑に行く、随分途方もない話である。(笑)さういふ事をやつて居るから金が足らなくなる。仕事をしない人が殖えれば殖えるほど、それを養ふ金を仕事をして居る人が負擔しなければならぬ。だから働いて居る人は税を澤山取られる。所がもう税は今より餘計取れない。もう極端まで出して居る。そこでどうしてもこれはやり切れないから何とかしなければならぬといふので、こ

の頃の内閣の更迭となり、節約案となつて、今頻りにやつて居るのですが、併し節約をするナンといふのは一時通れで、それが永久の解決策ではない。それは英吉利の事だけを申したのでありますが、獨逸でも亞米利加でも似たやうなものである。皆失業者が多くてそれを救ふ爲に苦心して居る。結局どうするかと言ふと、私は獨逸の議會へ傍聴に行つたり、新聞や雑誌を集めて讀んだり、機會があれば専門に研究した人の話を聴いたりしました。一體失業者の多いのはどうする積りであるかと聞いて見ると、結局この間獨逸の經濟學者が二三人一緒になつて發表した通りであります。諸君も新聞でお讀みになつたでせう、他にお得意を探すより外に方法は無い。これです。歐羅巴人が歐羅巴だけでやつて居つてはもう駄目だ、亞米利加人が亞米利加でやつて居つては駄目だ、他にお得意を探すより外に方法は無い。そこで他にお得意を探すと云つて何處に探す

か。歐羅巴ではない、亞米利加でもない。何處にそんな所があるかと言へば、四億の人間の居る支那、三億五千萬の人間の居る印度、八千萬の人間の居る日本、これを包容したこの東洋といふ廣いところの天地が九億の人間を有つて居る。この九億の人間をお得意として、此處で商賣して、此處で事業をやつて、此處で金を儲けて、さうして自分の國の苦しいのを救はう、斯ういふ事より外に途はありはしない。それだから今世界中は無遠慮に競争をする、口では平和を唱へて居るが、腹の中では競争をする。その競争が亞米利加や歐羅巴でやり切れないとすれば、英吉利も、佛蘭西も、獨逸も、伊太利も、亞米利加も、和蘭も、それ等の國は波濤が崩れるやうな勢ひで東洋へやつて来て、この東洋の九億の人間を相手に大活動をして、此處で儲けて自分の國を救はう、此處で事業をやつて自分の國を裕にしようといふ、この大きな舞臺で六つの國の大競争が行はれる

といふことは明かな事でありませう。その時に争ふことはつまらない、喧嘩をしてはつまらないといふ事を日本人が聲を喰らして言つて見ても、彼等は決して振り向いて見るものではない。その時に日本人が彼等の間に割つて入つて、彼等の競争の極端になるのを防いで、東洋の平和を保たうといふならば、「日本の御機嫌を損つては大變だ、日本の言ふことを聽かなければ大變だ」と、彼等が恐れ憚るだけの國力を造らなければ河にもならない。(拍手) 正義を唱へる力の無いものが正義を唱へても仕方がない。これが吾々日本人に取つて今最も大事な問題である。國に本當の力がなければ何にも出来はしない。支那に於ける日本排斥といふことも洵に憤慨の至りであるが、だん／＼煎じ詰めて見ると、日本が力の無い國だともみくびられて居る。これが根本である。「なんだ日本は、こんなに馬鹿にしたつて何にも出来ないぢやないか、腹を立てても立てつ放

した、騒いでも騒ぎつ放した、何が日本に出来るか」と思ふから、幾らでも極端に日本人排斥をやつて来る。外その侮りを防がうと思ふならば、内その力を蓄へずしては何にも出来るものではない。(拍手) だから今の日本に於て忠義、孝行、いろ／＼大事な事があるけれども、自分の今日の仕事に魂を打込んで、損が行つても儲かつても、人が見ても見ないでも、自分のしななければならぬといふ事は、命に懸けてもやるのだといふ、この心掛けを有つた人間が本當の日本人である。餘はもう本當の日本人ではない。これが今日の大事な問題になつて来る。併しこの事は言ひ易くして行ひにくい事でありませう。人が見ても見なくても骨の折れることはなか／＼普通では出来ない。電車の中でチョット人に席を譲るので「お婆さん、お掛けなさい」オーキに有難うございます」と言はれると、よい氣持になるが、向ふが黙つて居ると「なんだ、この婆ア、禮も言はない、

立つんぢやなかつた」(笑)といふ氣になる。どうして人間は普通の事では報酬の無い仕事は出来ない。チョットした仕事をして、人が見て呉れ、ばよい氣持である。人が見て呉れないと氣持が悪い、だから損の行く仕事はやらない、目前流ばかりやる。これを明治の初めから六十年間やつて来たから、もう今では目前流が骨身に滲み込んでしまつた。そこで明治の初めは何でも命懸けでやるといふ癖がついて居つたが、今では本當の命懸けなどは誰もやらないといふことになつて来た。これが總ての日本の禍ひの根本原因になつて居る。何とかして、人が見て居なくても本當の仕事をする人が出て来なければ駄目である。いろ／＼の問題はあるだらうけれども、先づそこからやらなければいかぬ。それには吾々お互が、自分のする仕事の結果が世の中の爲、人の爲に役に立つのを喜びとするといふ氣分を造らなければならぬ、理窟だけでは駄目で

す。理窟は簡單です、併し理窟だけではこれはやれない。例へば電車の運轉手がハンドルを動かして居る。あれは金づくではやれない。あの運轉手が一日に幾ら日給を貰ふか、假に一圓貰つて十時間働くとすれば、一時間十錢、一分間幾らになるか、二厘にもならないでせう。ハンドルをガチャンと一つ動かして、「ア、これが一厘五毛だナ」と思つたならば、それではやれない。(笑)ガチャン、これで三厘、體中がへト／＼になつてまだ十錢にしかならぬといふことでは、これは到底やれるものでない。所がその電車には一パイお客様が乗つて居る。そのお客様の中には商賣の用事で行く人もあるだらう、學問の研究に行く人もあるだらう、役所に勤める人も乗つて居る。若しも電車が動かなくなつてしまふと、或る人は商賣がうまく行かない、或る人は役所の勤務が勤まらぬ。或る人は學問の研究が出来ない。電車が無事にストラ／＼と動いて居ればこそ、商賣も出

來、勤務も出來、研究も出来る。俺が斯うして電車のハンドルを動かしてやることに依つて、役人には勤めさせて居る、商賣人には儲けさせて居る、學生には學問の研究をやらして居るのだ。自分一人の働きが大勢の人が國の爲、世の爲に力を盡す土臺を成して居るのだ。その爲に俺はハンドルを動して居るのだと思へば、非常によい氣持になる。(拍手)それは決して一錢五厘の仕事ではない。これは理窟はわかつて居る。ハンドルを握りながら電車を動かすことに依つて大勢の人にそれ／＼の仕事させるのである、それ／＼の力を果させるのであるといふことは、理窟ではわかつて居るけれども、たゞ理窟だけ考へてハンドルを握つて居ると、その間に腹が減つて來る。「ア、馬鹿々々しい」といふことになつてしまふ。なか／＼人間は理窟通りに行くものではない。どうしてもその氣分を造らなければいけない、心持を造らなければいけない。本當に自分のするこ

とが人の爲になると思つた時に、何とも言へない喜びを感ずる。その習慣をつくらなければならぬ。それが宗教の信仰といふものであります。(拍手)

どうしてもこれをやらなければいけない。佛様が一切衆生を教ふ爲に世に出て教をお説きになつた。その教に親しむことに依つて、吾々の心持が自ら佛様の心持に近いやうなものになつて來る。それを急に覺るといふやうなことは容易に得られるものではない。「俺もこの頃悟つた」などと言ふのは怪しい、悟るナンといふことはさうハッキリ境の附くものではない。九月十五日の午後十時半に悟つたといふやうなことは言へない。けれどもこの尊い教の中には佛の魂が籠つて居る、一切の衆生を我が子と見て、この一切の衆生をして本當に人間らしい生き方をさせようといふ大決心から説かれた佛の教の中には、佛の魂が宿つて居る。吾々はこの佛の教を學ぶことに依つて、佛を拜むことに依つて、佛に頼ること

に依つて、佛の名を唱へることに依つて自ら吾々の心と佛の心とが通ひ合つて、この心の中に、働くことを喜びとし、人の爲に力を盡すことを満足とするやうな氣分が出來て來るのである。これが宗教的生活であり、これが宗教の修行であります。(拍手)だから先刻言つたやうに、心讀、色讀しなければいかにいふのはそれである。たゞ口先だけではいけない、その事を能く味つて、その心持を本當に自分のものにして行くことに努めるといふと、いつかはなしに左様な心持が出來上つて、朝眼が醒めて床を離れる時に「俺は一體今日何しに起きるのだから、今一日幾時間心を動かし、身を働かす、自分の働くことが多くても少くとも周囲の人に役に立つのだ、世の中の爲になるのだ、國の發展の土臺になるのだ、今日の一日は無駄な一日ではない、尊い一日だ」と思つて床を蹴つてパツと起きる、その時の心持はいゝ心持である。(拍手)さういふ心持で朝眼を

醒して起きると、朝飯の澤庵の尻尾も鰻飯の味がする。(笑)それをやるのである。今日やれなかつたら明日やる、明日やれなかつたら明後日やる、これを努め力めて行きますれば力強いものになつて行く。併ながらさういふ事をたゞ自分でやつて行かうと思つても吾々は凡夫であります。迷ひの多い者でありますから、暇を偷んで、忙しい中に無理に暇を作つても佛の教を學び、佛の教を味ひ、佛を拜み、佛に頼るといふ修行をしなければいけない。それではなければ自分の力だけでこの心の修行といふものは出来るものではない。

斯して佛の教が本になつて國の政道も立ち、國の隆盛になつて行く本も造れる。日本は昔から他を侵略するやうな國ではない、日本人は一度でも自分の國土を擴張する爲に戦をした覚えはない、日本は本當に正義の國である。たゞどうも金儲けの下手な國である。困つたことには懶け者の多い國である。皆

て、本當に喜びの心持を以て仕事をしようと思つたらどうなるか。その人の顔附が違つて来る。その人の手附足附が違つて来る。道を歩いても足に力がある。口をキユツと結んで、眼を大きく開いて、その人の手附、顔附、見る人が「成程」と思はず眞面目になつて来る。店の小僧さんが一時間店番をして居る間に、口をキユツと結んで、眼を大きく開いて、腕に力を入れて、甲斐々々しく働いて居れば、店の外を通る人が皆その小僧さんの姿を見て眞面目になつて通る。さうすればその小僧さんは一時間の店番をして居る間に、外を通る何百人の人に、お前も眞面目になれ、お前も確りしろ、お前も働けといふことを身て教へて居るのである。菩薩の行といふのはこれでありませう。働きながら周囲の人に教を傳へて居る。斯ういふ人が國を教ふのである。自分達の毎日の仕事に魂を打込むことに依つて、自分の顔附、自分の手附、自分の足附、體中で以て、周囲の人に

がモツと働いて、モツと眞面目になつて國の力が出来て来れば、この力のある國が一たび起つて正義を叫べば、世界の何處の國もその言ふことを聽かない譯に行かなくなる。そこ迄行かなければ駄目である。どうも困つた事には日本は昔から暮しが樂であり、外國の侵略を受けたこともなければ、苦しい目に遭つたことも無いものであるから、今でも苦しくないやうな料簡でお互が居る。「弱つたな」と言ひながら腹の底では「何とかなるだらう」と思つて居る。何ともなりはしない。「不景氣も今年あたりがどん底だらう」「五年も前からそんな事を言つて居る。(笑)五年續きのどん底ナンといふものは無い。そんな暢氣な事を言つて人を恃んで居るから駄目である。今に何とかなるだらう……何ともなりはしない。自分がやるより仕方がない、自分の心の土臺を建直すより外に吾々を教ふ人は無い。

若し吾々が本當に自分の今日の仕事の價値を認め

確りしろといふ教を與へることが出来る。どんなつまらない地位に居る人でも、その人は日本の國を建直す大事な仕事をして居る人である。(拍手)斯ういふ人が多くなれば日本の國は救はれるのである。

斯して佛法と王法——王法は國を治める道、王は國を代表して居る人でありますから、王法とは國を治める道であります。佛法といふ佛様の尊い教と、王法といふ國を治める道とが一致して、吾々の信仰的生活が即ち國民生活の土臺になつて參るのであります。今から六百五十年前に日蓮聖人が世に出られて、立正安國——正しき教を立て、國土を安んずると言はれたのは即ちこの意味でありまして、近くは本多上人が一生涯の間法の爲國の爲に叫ばれた御趣意も此處にあつたと私は思ふのであります。日蓮聖人の六百五十年を記念する爲には、吾々として立正安國の御精神を發揮しようと思つるに如くはない。本多上人の教を受けた方も澤山おありでせ

うが、上人の追善を勵まうと思ふならば、立正安國の主張を世に弘めて、世の中の人と共にその道を進んで行かうと決心する以上の善事はないと私は信じます。(拍手) その意味で今日は自分の感想の一端を御参考までに申上げた次第であります。(拍手喝采)

開顯統一と日生上人(乾)

商學士 中村清一

わが帝國の國體が世界に冠たる所以は、八千萬の國民が一天萬乘の陛下を聖主と仰ぎ、陛下の御爲ならば身命を失ふとも少しも悔ゆることなき忠勇の精神を有つと共に、陛下に於かせられては決して人民の利益を離れて單獨に自己の安慰を得んと力むることなく、萬民を吾が子の如く思ひ、臣下とその繁榮を共にせんとして、慈悲の御心をもて國を治め給ふ所にあるのであつて、而もこの君臣の關係が一時的便宜的のものにあらずして、實に建國以來天壤と俱

に滅びざる永遠の大義として確立せられてゐる所に
あることは、何人も否定するものはないであらう。
勿論、國家存立の目的は、この民族が世界の他の民族と共に永遠に繁榮し幸福なる生涯を送ることに存することは今更いふまでもないことであるが、而もこの民族の利益幸福なるものが一時的のものにあらずして永遠に滅びざるものであり、局部的のものでなくして治く一切を潤すものであるためには、各個人が銘々自己の利害に専念したり、或は一時的なる物質上の享樂に身を没入することなく、右の如き國體の永遠的確立を冀ひ、この國體の擁護のためには如何なる苦難に遇ふとも全民族をあげて奮闘することが最も必要なこととなるのである。即ち日本國體は民族の安寧幸福を決して無視したるものでなく、寧ろ、これを最も綜合的に徹底的に永遠に實現するための最高の原理であり窮極の信念であることは治く理解されてゐることであるが、こゝに法華經の教ふる開顯統一の原理が最も鮮かに發揮せられてゐることは、吾々日蓮主義者の見逃してはならない大事な點であると思ふのである。

守護國界主經に曰く、善男子よ、大龍池の如き、龍若し住する時は水常に盈ち滿ちて龍鬚魚鼈の水族皆安らかなり。龍若し去る時は水便ち枯涸して水性の屬皆滅して餘り無けん。國王も亦爾なり。故に我偏に國王を守護せよと説くなり。

一體西洋人は理想主義と實用主義や功利主義とを對立させておくからして、兩者がいつも相争つてゐて、到底法華經の教へるやうな統一の妙旨に達することが出来ないものである。元來宗教とか道德とかいふものは人間の至上の要求たる信仰心や道義心より發するものであつて、従つて宗教や道德の上に立つ生活は人間の精神上並に肉體上の幸福を最も崇高な意味に於て圓滿に實現するものである。然しなから人間の一時的な低劣な欲求は往々信仰や道德の崇高なる要求と矛盾することがあるであらう。而してこの矛盾に際しては道義を以て欲望を抑へ信念によつて苦難に打克つことが最も必要であつて、これが結局に於て人間の高尙なる幸福と合致する。それが故に宗教道德と人間の俗生活との關係は二つにな

る。即ち一は兩者が最高の意味で統一せられて一つになつてゐる方面であり、他は兩者が局部的に對立して夫々別物になつてゐる方面である。而してこの對立の方面で兩者が矛盾するときは、斷然道義を取つて利を捨てるのであつて、これが孟子の所謂「二者兼ねることを得べからずんば、生を捨て、義を取る者なり」といふ格言に他ならないのである。この様に第一義諦と世諦との一二につき微妙な意味合をさざることが大切であつて、これを仁王經に次の如く諷つてゐる。

二諦は常に即せず 解心に無二を見る
二を求むるに得べからず 二諦一なりと謂ふにあらす
一も亦た得べからず 解に於ては常に自ら一なり

諦に於ては常に自ら二なり 此の一二を了達して眞に勝義諦に入る。

佛法と世間の儒教其他の教との關係についても同様である。佛教は決して世間の通常の道德と矛盾す

るものではない。寧ろこれ等の一切を眞に活躍せしむる爲の一段と深い教を與へるのが佛教である。その深い教といふのは道德上に於ける因果律と信仰上に於ける歸依三寶とである。優婆塞戒經に

佛の言はく、善男子よ三法あり能く是の戒を淨む、一には佛法僧を信じ、二には深く因果を信じ、三には心を解せよ。

と教へられてゐる。第三の心を解せよとは人間の本性を觀察する哲學的方面であつて、この點に於ても佛教は儒教其他に比し餘程深い所まで入つてゐる。

次に佛教の内部に於ても、權教と法華經との關係に於てこの開顯主義が活躍する。天台大師が玄義に蓮華の譬を以て説かれた施開廢の思想がこれである。こゝに於て最も大切なのは阿含と法華との關係である。阿含經は佛教が世間の一般思想との關係に於て成立する根本を教へたものである。従つて、佛教の人生に對する立場は、先づ阿含の教によつて開拓されてゐるのである。然し、阿含は最後の結論で

快な點である。將來の佛教徒はこの意義に於て阿含を小乘として貶することなく、その眞價を十分に發揮せねばならない。然し、一方法華經の如き高き教を否定する所謂大乘非佛説、無神論等々の運動は、開顯主義を知らざる惑むべき徒の仕業であることを忘れてはならない。

以上の如く、開顯統一主義は單に教相上の問題ばかりでなく、世間出世間の一切の問題に光を與へる所のよき規範であるといふべきである。その要點

はない。阿含を完成するものは法華である。法華經によつて阿含經を開顯し終つた最後の成果は涅槃經及法華部の他の諸經に示されてゐる。能統一の絕對權威は法華經にある。その法華經が更に阿含經の如き實踐的な方面に歸つて、種々の問題を比較的詳しく説いたのが涅槃經である。あたかも、論語が儒教の最初の基礎的な實踐的な立場を示し、中庸が深き意味に於て論語の教に原理を與へ、孟子が之を實踐的に活用して、再び詳細な説明に入つたのと、やゝ似た所があると思ふ。以上の三大經典が本多上人の所謂正系佛教である。他の權大乘經は寧ろ法華經の最高思想に至るまでの種々の特殊的研究である。譬へば議會に於て委員會が任命されて特殊な問題を研究するやうなものであらう。この見方は天台大師の四教説に於けるよりは一層阿含經を重視したものであつて、而もこれは法華經の「決了聲聞法是諸經之王」の教に合致したものである。阿含を法華の意義に於て見れば、阿含そのまゝが最高の教に通ずるものである。殊に阿含經が法華經と同じく釋尊中心主義の佛身觀をとつてゐるのは、吾等にとつて最も愉

は、何事についても第一義と第二義以下と對立する相對判の場合には、何を措いても第一義に絕對權威を持たすことである。而も、第一義は絕對判の場合には第二義以下の一切を綜合的に活用してこれをその最も深遠なる意味に於て復活させるのである。日蓮教學に於ける本迹の争もこの開顯統一主義によつてのみ解決される。今日の思想問題も、精神と物質との關係や國體問題等についてこの思想が理解されば、少しも憂慮する所がないであらう。(次續)

日生上人を憶ふ

(其七)

併而第一周忌報恩奉悼會

聖應院日生上人の一周忌を迎えて

本佛教會主 和 賀 義 見

二種の 人

涅槃經に「善男子よ、不信の人は瞋恚心の故に説いて、佛法僧寶有ることなしと言ふ、信者慧無ければ顛倒して義を解し、聞法者をして佛法僧を誘せしむ。」とあるが、眞に現代の相を描寫せるものと言はなければならぬ。

佛教徒が佛教に對する正しい信解に立ち、又その實踐に於て、社會大衆の心を掴んで引き付けるだけの眞剣さがあつたならば、反宗教運動の如きものは起らなかつたであらう。そして又反宗教徒輩に國を呪ひ世を呪ふ心、即ち瞋恚心がなかつたならば、宗教打倒の行動は起さるべきものでない。此の二の誤が一世に瀾漫し今日の情勢を造り爲したのである。増一阿含に「佛が羅閱城の迦蘭陀竹園に五百人の弟子等と共にお出でになつた時、一人の長老が佛の方に向つて足を投げ出して睡つてゐるのを御覽になつて。

長老と言ふのは

必ずしも髮鬚を剃れるものと

かぎつてはゐない

「汝は道を求めながら尙斯様なことを考へてゐるとすれば、道を修業してゐない時はどんなことをするかわからない」と言つて警告をした」と言ふことが説かれてあるが金の力や、阿諛叩頭や、醜い政治的策動、それ等に依つて贏ち得た袈裟、乃至固定化された不合理なる階級意識、それ等が誠の僧伽の精神か。教界の大反省を促さなければならぬ重大事である。

苟も志あるものは彼等の心事の陋劣なるを見た時、決して彼等に伍することを屑とするものではない。宗團を毒するものは没道心の輩である。

斯かる事柄を對象として教團に對する大衆の憎惡の焰が燃えるのである。宗教界の爲憂ふべきことではないか。

故に涅槃經には「護惜建立 死身弘法」と示され法華經には「不自信身命 但惜無上道」と説かれてある。日蓮聖人は「身命に勝る惜しきもの、無ければ、此を布施として佛法を習へば必ず佛となる」と仰せられて、色讀を嚴誡されたのである。

聖應院日生上人が統一團協賛會の事業を遺されて法

いかに年齒たけたりとも

愚行を免れなければ

長老とは言はれない

(中略)

如來の言ふ長老とは

必ずしも先に出家したといふことに

かゝはらない

善き行業を修し

正行を分別し得るならば

たとへ年は幼少にして八歳なりとも

之を長老と言ふのである。」

と斯様なことが説かれて居るが、今日の教界の情勢はどうであるか。驕慢と安逸の中から割り出した概念、それがどうして時代を指導する權威があらう。錦繡を以て覆はれた醜惡は斷じて大衆の誕生となる力はない。たとへ墮勢に依る信徒を贏ち得たとしても、やがてそれらは離れ去る運命を辿るか、然らさんば闕達正義の心を失つた者となり終るであらう。維阿含に「一人の比丘が道を修業しながら美しい袈裟をかけた」と考へた時、一の骸骨が現はれて

統の愛護を付囑せられたのは、眞に時機に適へるものである。何となれば上述せる如きあらゆる弊害より超越して、佛祖の眞精神を顯現することに於て、時代に最も適合せる原理と活動とを持つものなるが故である。

聖應院日生上人の一周忌を迎ふるに當り、昔ねく天下有識の、本會に對する認識を正確にせられ、異體同心の協力を賜らんことを切望して熄まないものである。

統一團協賛會主催報恩奉悼會 三百六十五日、永く感ずる人もあれば、早や一年暮れたかと思ふ人もある。人は其觀察點に従つて千差萬別の感想を懷くが、いづれにしても 日生上人の御遷化後は教界の寂寥嘆た悲哀を痛感する。ある人が新天地に於て教化事業開拓に志したが、當局への紹介をと思つても、今はオインと頼む人がない、直ぐ運ぶことも随分無駄骨を折らねば……と愚痴つて居られた。日生上人御生前は兎角の論をなす者も、今や追慕の至情は日を逐ふて人毎に聞くこと繁し。従つて御一

周忌法要が各所に各様に營まるゝ、亦美しい情操ではあるまいか。

我統一團本部は協賛會の名義を以て、正當遠夜に膺る三月十五日夕景から、日生上人の過去三十有餘年、始めて獨立した顯本第一宗義布教所を御建設になつた記念道場たる、淺草新福井町報恩閣に於て日生上人と眞俗俱に最も御縁故の深い 鈴木日雄上人大導師の下に、御遺族や御親戚の方々を始め純潔清淨なる人々が聚まつて盛大なる報恩奉悼會が營まれた。

是より少し先に 姉崎博士は今晚は已むを得ざる要件があるからと、其舉式一時間前に態々御實前で、自我偈一品御回向下さつたことは、一同大に感激に堪へぬ有難い御芳志であつた。大法要の際、本會上田理事長の言上文は左記の通り短文ではあるが、生ける上人と面接されたかの感を與へしめられた。

維時昭和七年三月十五日 恩師聖應院日生上人第一周忌正當遠夜ニ膺リ 本會ハ 上人發祥ノ道場タル當報恩閣ニ於テ 恭ク法筵ヲ開キ香燈ノ奠ヲ致シ 虔テ常住實在ノ日生上人ニ白ス

日生上人を追慕する者の心の底をばお互に語り明かすことが一段と今夕にはふさはしく意義深いものではなからうかといふことで、八時より座談會に移つた。梶木顯正師の開會の辭に續いて先づ 鈴木上人が起られた。

私は小學校時代から、今でもありますが姫路の城東小學校で、本多上人も自分も同級であつた。其時分から上人は將來自分で出家得道しやうとの志であつたから、學校から歸るや否菩提寺たる妙善寺へお出になり本多老僧に就て法華經の眞讀をなさつた。十歳か十一歳位の時から練習をされたのである、私共は其時は僧侶になる考へは毫もなかつたから學校の歸りは受持先生の宅へ復習に寄る。そして其歸りにお寺の前に來ると上人の讀經の聲が聞える、十一歳位で既に眞讀が出来たのであつた。御承知の通り法華經の眞讀は六づかしい、殊に譬喩品の偈文には六づかしい字が澤山ある、「譬如長者 有一大宅……」から六づかしい文字が一ぱい列んで小僧達は大困りする、小僧泣かせて師匠に八ヶ間敷く叱られる、この譬喩品の

情々以ルニ前年 上人最後御劃策ノ統一團協賛會ハ今年今月ヲ以テ財團法人統一團ノ申請ヲナスベカリシモ聊カ四圍ノ狀況ニ鑑ミ二ヶ月ヲ延期シ來ル五月ニ於テ萬難ヲ排除シ必ズ其御理想ノ第一項ヲ實現シ彌々 上人畢生ノ主義方針ヲ踏襲シ爰ニ數百年積積セシ 立正大師ノ精髓ヲ普ク顯揚シ以テ 佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ 教旨ノ正明 研學ノ潤達 活動ノ旺盛ヲ標語トシテ時代對應ノ教化ヲ認ラザラシメ 上人ノ學風ヲシテ永劫ニ光輝アラシメンコトヲ思フノ淨念倍々切ナルノ餘リ茲ニ純潔無二ノ血盟同志相聚リ報恩奉悼ノ法要ヲ相營ミ至誠ヲ披テ言上スル者也 仰キ希クハ 本佛釋尊一大導師日蓮大聖人並ニ 恩師上人哀愍シ納受加護アラセ給ヘ 南無妙法蓮華經

統一團協賛會 理事長 上 田 辰 卯 敬白

續いて磯部氏は泣きながら報恩文を捧讀し、満座又獻歌の哀音其所此所に聞えた。……法要後の講演會は、特に一二の名士方にお願するよりも宜しく

偈文は小僧の袖かくしと申して居る。それを上人は 老僧日境上人に就て十歳十一歳の出家前に一經を覚えてしまわれた。

上人は學校に行つても多くの子供等とは遊ばれない、何となく一般の子供とは違つて居た。其後上人は妙善寺の隣りにある妙立寺の池田日昌上人により得度されたが、日昌上人は得度式の翌日から病の爲めに臥され遂に臨終された。そこで親達も御心配になり未だ幼少だからといふので、他によい師匠もがなといふことで、幸ひ京都寂光寺の兒玉日容上人は關西には名が聞えてゐたから、此の師に隨身された。而して上人は實に謹嚴によく此師に仕へられた。

一例を挙げれば寂光寺は京都本山の一つで境内は廣い、そこには雜草が一杯生へてゐる。上人は兒玉師匠から御書の講義を他に林といふ弟子等と共に聞かれるが、其の講義の前に草採りをされる、處がそこにはブイが澤山にゐて整すけれども、上人は眞面目によく手入れをされ而して師匠に能く仕へられた。私は其後に日容上人の弟子となつた

ので、恰度上人に隨身して津山に行かれてからも御書の講義観心本尊抄とか開目抄等々あつた。其時に上人は所謂一を聞いて十を知るといふ格であつた。自分は此人は子供ながら其了解の早いこと、實に言ひ盡せない状態で、全く非凡であつたことを思ふ。而してお名前の聖應は池田上人のおつけになつたので、日生は兒玉上人から頂かれた。よく兒玉師匠は、聖應は將來ある人物である、唯一宗一派の管長、妙満寺派の管長位には捨て置てもなるが、そんな小ボケナ管長ではいけない、世間に出て大人物となれ、今日から其氣で大に精進せよと始終云はれてゐた。其時に上人は十六歳時代で、今ならば中學校時代である、其頃すでに上人は法座に上つて説法された、私もそれを聞いたが、因縁話などで女子供にも能く判るやうに説法された、日容上人の方は教學の造詣が深いから教義上の六づかしい話が多い。然るに本多上人は因縁故事を引いて話されるから聴衆は皆悦んで、聖應さん／＼といつてよく聴きたがるのであつた。こんなお話は限りなくありますが、まづ上人は幼

年時代から一般の人達とは異つた點があつた。かういふ譯で私はこれは偉い人だと心から伏してゐたのです。其後の上人の御活動は申す迄もない皆さんの能く熟知されてゐる通りである。私は常に心中に光榮と感ずることは、出家して正法正義の正師の側に居た事である。先づ日容上人に仕へて薫陶を蒙けた、この日容上人は寔に偉いお方である。今日は師弟の關係といへば其師の徳を慕ふことが薄い、却て師から何かを獲ようとする者が多いやうに思はれて遺憾であるが、私共は兒玉師匠に對してはそんな心は微塵も起らない。其後に小林日至上人、此の方は中年僧だが是れ亦非常に傑物で、初めて東京へ出られたのは明治二十三年であつた。其前に日生上人の宗門改革があり、其後兒玉師匠は大學林長として御出京を請はれたが、其時に師匠は自分は病氣で最早永く活けることは出来ぬから、あとは小林上人がやつてくれればよろしいと云はれたお方であつた。この日至上人にも仕へた。それから本多上人とも東奔西走よくお伴をした。即ち兒玉師匠、小林上人、本多上人等に

關係を持つて来たことは何としても幸福であつた、光榮であつたとの外に何物も感ぜない。かゝる正法正師の方々に因縁を結んだことは光榮であり幸福だとの念が去らぬのです。未だ色々ありますがあとの方もあるからこれでご免を蒙ります。次に河合陟明氏は謹嚴なる態度を以て、恩師日生上人は宗教家の天才であることから其睿智に就き、又其護法心の篤き點等、恩師の巨大さを物語り、この正師に因縁づけられ佛道を成ずることが得らるゝことを無上の歡悦満足とし、法統の愛護と護國を再び茲に誓ふと述べ。次に山口師は名古屋大八木義雄氏からの左記追慕の熱情文を代讀された。

日生上人の御一周忌に

私は大正の中葉より求道心強く動き、故石川素童禪師や新井石禪々師にも面會して、親しく道を聽いた事がありました。大正十三年の秋頃から名古屋行學會に於て、日生上人の法華經要文の御講義を聴き、同十一月二十五日には常徳寺に於ける公開講演を聴き、茲に始めて上人の唱へらるゝ日

蓮主義を知り、是こそ多年求めに求めた道である事が判り、爾來一意上人に歸依し奉り、名古屋に御巡教の時には殆ど缺かさず御目に懸り、又御説教を聴き、遂に昭和五年十一月二十四日には、上人を拙宅に請じ奉り、茲に嚴かに改宗の式を擧ぐるに至つたのであります。誠に上人には始めて謁した時から深く信伏し嘗て師と仰ぎたる新島福澤兩先生と共に三大師に事へ得たる事を終生の歡喜幸福とするのであります。上人に歸依して以來感激の深かりしは、上記の公開講演に於ける二時間餘に渉る大獅子吼で、其歸路には實に血湧き肉躍るの感激にて足も地に着かぬ様な思ひがして、是れ我が多年求めし佛教なり、此人こそ現代に於ける吾師なりと直覺した事と、拙宅に於ける改宗式に當時既に不治の御病を藏し給ひしに拘はらず今日欣然として來たと仰せられ、式後原田日勇上人や清水一乘上人も御同席にて多時御開談ありし事にて、今尙其座敷に在らせらるゝ様な氣がするのであります。而かも若し此日に改宗式を擧げなかつたならば、遂に上人に依て式を擧ぐる事は永

久に出来なかつた事を思ひ、誠に 教主釋尊 宗祖日蓮大聖人の御導きなりしと感激に堪へないのであります。其他法華經要文の御親講を聴き了りたる事や、事に付け折に觸れたる御坐談の印象深く残り居る事等、數多ありますけれども是に止め、茲に御一周忌に際し、此拙文と歌二首を謹んで御靈前に供へ奉る次第であります。

いにしへの身延の山のひしりよと

あかめし君を偲ふ今日かな

弟子はみな正しきのりの道ふみし

師の足跡をふみもたかへす

南無妙法蓮華經

至心合掌恭敬再拜

昭和七年三月十五日

名古屋 大八木義雄

次に御親戚沼部彌太郎氏は追憶談として、私が先年、大正四年丹波の福知山にゐた時、陸軍婦人團の爲めに日生上人にお話を願つた。其際綾部の武上人などが、此の機會に福知山の劇場でもお願ひしたいといふことであつた。今迄は劇場に

於て僧侶の講演などはしたことがなかつたものですから、宣傳ビラを貼出した時に、他宗の方が今日は法衣を脱いでお話し下さるやうにといふ珍妙な申出でもあつた程でしたが、勿論上人はいつもの通りで御出ましになり、其時はさしも廣い大劇場も満員で入り切らず窓といふ窓から黒山のやうに顔を出してゐる位大盛況でありました。

それから婦人團の講演には、當時ある隊の奥さん達が甚だ華美に洗れて居た、甚だ贅澤な悪風が旺んであつたから、隊長からどうか、かゝる弊惡を矯正されるやうにお話を願ひたいとの注文で、其時にラシクといふことを話された。凡そ「軍人は忠節を盡すを本分とすべし、軍人は禮儀を正くすべし、軍人は武勇を尙ふべし、軍人は信義を重んずべし、軍人は質素を旨とすべし」といふ五箇條の精神は、主人がいつも離さず持つて居るから、之に連れ添ふ夫人も其心にならねばならぬといふことで、第五條の質素といふことに力を入れてお話しになつた。どうしても主婦は主人の精神と等しく即ちラシク勉めねばならぬといふことで、お

かげで一時は餘程風俗もよくなりました。私は追憶の一段としてこれだけ申上げる。

次に山口智光師起つて、今晩は協賛會が主催となつてこの會合を見ることの出来たのは悦ばしいことで、會の事業に就ては、日生上人の御遺志を繼承して遺漏なからしめたい、と前提し。

大正十年頃私は京都に參つて、上人が妙満寺で御講演された時に拜聴した其一節に、會ではこの妙満寺も色々問題は起り自分も追ひ出されたが、信仰の純潔を持たねばならぬ、自分は日容上人の志を繼いで活動した、其爲め剝離處分にもなつたが、何等疚しい點はないから意にも介せない、自ら日蓮聖人、日什正師、日經上人と相承して眞の活動をといふこと、それが顯本法華といふことで働かれた。後日宗門が用ひて顯本法華宗となつたこともおもしろいと思ふ。

有名な各宗綱要編纂から引續いて宗門としては、どうしても日生上人に歸つて戴かねばといふ事であつた事を話されて居た。其時に上人の嚴父は「アナタは宗門に歸らるゝさうだが、活動するにあ

たつて御注意を致したい一事は成佛の一事である、これを忘れぬやうのことであつた。日生上人が宗教界、思想界に働かるゝ時に「成佛の一事」と「信念と宣傳」この二者をよく活用された事は吾等の注意すべき點である。

日生上人ある時に仰せらるゝには此頃の寺は宗教的生活をはなれて來た、大きな寺では人の集つた時に皆が集まつて料理もし而して一所に食事をする所がよろしい、お客氣分はよくない、一つ鍋をつゝく所に宗教味はある。今度統一團本部を建設する時には其の積りで臺所を設計し大根や澤庵漬を嗜りつゝ、信仰の話をしやうではないか、これは大切な點であると仰せられた。又同師會の者をお勵ましになつては、東洋文化の精髓を講明し全生涯を捧げて之が習學と宣傳に致せよと仰せられた。かくの如き意味を考へ現下の一周忌に當り大きな足跡、大道を踏み遠へすに行きたいものだ。

といふ所感の一端を述べられた時に、沼部夫人、即ち日生上人の令妹は、只今お話になつた中で、日生上人のお父様が上人の宗門に復歸せらるゝことを寧

ろお歎びでなかつたお氣持に就て、上人は「泥の中に蓮の華は咲きますから、素に歸つても、どうか御安神下さい」と申されたのであります、これは當時父の枕頭にあつて妾は承知致して居りますから、一言申上げておきますと、御註釋を與へられた事は全く有難い一節と感謝する。

次に朝鮮の横山恵正師 幸に御上京中で、明朝歸釜の途に就かるゝ由、そこで所感を述べて曰く、

幸に日生上人の御一周忌に際し皆様の追憶談に遇ふことが出来て洵に有難い。私共朝鮮に參つて活動するにも常に上人の意氣と信念を以て鏡として居ります。私の師匠は先般遷化された上田日印上人であるが、信仰の強盛な師でありました。私はどうも寺坊主となりたくない、そこで新天地へと志し釜山に上陸した時は懐中金七錢五厘しかありませんでした。併し私は眞に佛様が在りますならば、決して徒らに死ぬものではあるまいと心強く思つて、一週間は飲まず食はずにやりましたが、一週間後にある人から金貳拾錢を供養された。これは大きな力となりました、此人は今も毎月十五

人があつた、其人がそれから一週間後に朝日新聞紙上で、本多上人のなくなられた事を讀んで又泣いた、これは私共の日生上人追悼會の際に於ける其人の感想談であります。

實に日生上人の死たるや大きな響を與へます。傑人の死は皆さうであります、日生上人のは唯偉大ばかりでない、其實踐的であり其遺志を繼いで行かねばならぬ。信仰に燃えて居る人には大きな力を與へられます。眞に日生上人を思ふならば先づ自己を改造し、家庭に 社會へと其周圍から實踐的に精進して頂きたい。これを私の感想と致します。

次に鈴木うた子女史身を起し、

私は十八歳の時に入信し、本多上人に來る前は村雲系の高田妙信尼に師事して居たが、日蓮聖人のお話によく聞くがお釋迦様のお話は少しも聞かせられない。遂にたまらずして此方から聞くと、お釋迦様はあまりに有難い尊いお方ですから、私共は祖師について居ればよいといふ譯で少しも教へられない。其内に田中道爾さんや芦田太吉さんが

圓づゝ送つて呉れますが、畢竟するにホントに身を粉にしてかゝれば必ず救はある、佛の實在は強く信じて居ます。私は當年四十三歳、至極元氣であります、朝鮮には十七年布教して居ます。全鮮に單稱は三十二箇所の淨舎はありますが、語るに人なしと云ふ鹽梅で、従つて私は今日迄一貫して社會教化に携つて居る爲めに、今度滿洲に於て活動するやうになりまして、其の爲め先月の二十九日に此方へ參つて居ます。

日生上人の偉大なことは、田中智學氏が鳥の啼かぬ日はあつても自分の國體を叫ばぬ日はないといふに對し、日生上人は教化第一で本佛の光顯と佛敎の統一に終始された、この意氣は實に大したものであります。

私共は一步海外に踏み出した時に、日本の尊さが知れるやうに、我願本法華宗の中に居ては上人の偉大さは知れない。

一冊の日蓮主義精要を讀んで、成る程日蓮主義とはかういふものであるかと眞に自分の求めんとする處が、心にピツタリ來たので嬉し泣きに泣いた

來られて、統一閣には本多上人といふ名僧が講演されてゐるから是非行つて聴くべしとの事で、四年前に伺つた時、不思議にも其際本多上人は本佛釋尊のお話しをされて居た、第一回のお話で私は一轉して、これから正しい信仰へと理解しました。併し今一つは、何も願本法華に限つた事ではあるまい、いつかこれに關して日生上人にお伺ひしたいと機會を覗つて居たが、或る時統一閣で日生上人は願本法華のお話をなさつた、何といふ有難い又勿體ない事であるかと深く成る程と感激せしめられた。其後は自分は女ではあるが、女子で布教に従事して居る方は少ない、幸ひにも私には子供がないから、自身に働く事を考へた。坊さん等はなか／＼此正しい教を徹底的に説かれない、依て自分は油となつて電車の運轉を滑かにする如く護法に盡さうと決心した。

それより昨年十二月濱松へ出張講演した時に吉野村の面白いお話等をされて、日生上人のお徳を追慕された。

次に和賀義見師は左記の如く 日生上人は統一閣協

贊會を御劃策なされざる可らざる所以を縷述された。

日生上人の御一周忌に當つて、各位の護法の熱情に溢れた御感想を聴いて、洵に感激深いものがあります。思ひ廻せば一昨年十二月の一日妙國寺に集りました時に、上人は大寶積經八十八巻をお引きになつて「迦葉が佛に申して言ふに當來世後の五百歳には形沙門に似て袈裟を被て正法を毀滅するものあらんと、時に世尊は此を以て如來に問ふ莫れと訓したまふ。迦葉は如來久しく世に住して利益したまへと請ふ時に、世尊告げたまはく假使千佛世に出づるも彼等の惡を息めしむべからず、然も後の五百歳に其心清淨にして能く佛恩を報じ我法を守護するものあらん」と、自分は今日迄數十年間教團の爲めに努力し來たが、而かも猶今日に於て彌々彼等の墮落を見る、思へば「千佛出世すとも彼等の惡を息めしむべからず」と説かれたやうに、自分の努力は失敗であつたか。矢張り「此の法を汝に付す、彼等の痴人には汝の語を聞かして改悔の心を生ぜしめよ」と宣ふた如

く、統一團協贊會の事業を成立せしめて、現代並に將來に向つての日蓮主義運動の好指針たらしめねばならぬと仰せられた。法統の愛護を以て生命とせられた。日生上人は同じく法統の愛護を以て最後の教誡とせられ、而して之を協贊會に對して囑望されました。されば吾々の淨業に向つて認識不足であつたり、理解されなかつた方々は、此際本會の眞精神をおくみどり下さつて、どうか上人の御恩に報ひんとする私共の心に御協力給はり、此の仕事を成立せしむべく御力添へを頂きたい。

時間は早くも十時を過ぎた、追慕の熱情は彌々加はるばかりである、夜と共に語り明さんか。併し齋で靜かに慮ふに明日の活動を控へて居られる人々、一時の感情にのみ支配さるゝ事は、日生上人の御教ではあるまいと、小西日喜師は閉會にも追々切迫して参りますから、御感想をば簡單にお願ひ致したいとの御注意で、満堂の緊張いやが上にも靜肅に見えたので、磯部滿事氏は當に閉會の挨拶に入らんとした刹那、今迄は御遠慮されて居た、日生上人の愛護今は大阪の友廣夫人は、いととやかに起立され、

父の慈悲深かつた點と自分等子供に對しても敬意を以て迎へられた二點を左の如く涙と共に物語られた。

父がなくなられて後、或る人は私に仰せらるゝに「お父さんは常に外出なさつてお留守が多いやうでしたから、おかくれ遊ばしても勿論お悲歎ではございませうが、お淋しいお感じはありますまい」とのお言葉も、「イ、エ」と言下にお答へ出来る丈けに、父はホントに子煩悩でございました。又敬つてくれました事は、私が大阪の方に嫁ぐことに決して、一日親しい方々とお別れの御挨拶を致しましたが、其席へ父は病の爲めに出ることは出来ませんので、私は父の臥つて居ます三階の下坐敷へ参りますと、父は病床にあつて脇息に倚りつゝ大藏經を拜讀して居りました。私はお父様お茶を召上りませんかと申上げますと、イキナリ湛然として正座されたのには私も驚いて、お父様随分お改り遊ばして……と申上げますと、父は今迄は我娘でありましたが、これからは人の奥さんでありますから、私の態度も變つたのであるか

らお前もその積りであつてほしいとの仰に、私は非常に感せしめられました、大阪へ参りましてからも随分困難な場合にも此時の事を憶ひ出しては勵まされて居ます。

更に慈悲の方面を申上げますと、私が大阪に嫁ぐ日にお別れの御挨拶を致しました時、小さい姉に申しますやう「わしが玄關迄も行けぬから、お前代つて見送つてやつておくれ……」。自動車が見送つて大玄關を離れんとした時に、姉は父がどうされてゐるかと思ひやかに覗き寄りますと、父の姿は床から失せて、懐しさうに縁側から私を見送つてくられて居たのです、姉は其儘靜かに再び引かへしめました。暫らく経て父は、小さい姉に「自動車は随分立派だつたかエ」と訊ねました。姉はお父様はよく御存じのくせにと申上げますと「アハ……」と哄笑致したのでございます。

又昨年二月の末、看護の爲め母は晝間、姉は夜分といふやうに病床に詰めて居りましたが、連日の看病に姉は疲れて我れ知らず父の下に居睡り致しまして、朝雨戸を女中の開ける音で驚いて目覺め

ますと、何時の間にか姉の上には父の毛布がか、
つて居ました、……

和子夫人の一語は一語より深刻に私共の肺腑を刺さ
れるやうに悲しみがこみ上げる、聲涙共に下る追慕
の至情に一同は膝に銀滴の幾點かを印した。親子の
情こそ美の極！ 噫何といふ眞であり善ではない
か。胸迫つて閉會の辭も出でず、緘黙のまゝ、深い
／＼無量の感慨を懐いて各々 日生上人の尊影を拜
しつゝ散會したのは十時を過ぐる三十分であつた。
猶本會は教化といへば日生上人、本多上人といへば
教化と思ふ程教化第一主義で一貫された上人の意を
體し、御一周忌記念として五大都市を始め朝鮮滿洲
等の圖書館、學校、教化團體及び工場等へ文書傳道
の爲め、「日蓮主義の本領」「日蓮主義心髓」及び「本多
日生上人」三百九十冊を寄贈することを得たのは、
寔に有難い意義ある報恩追悼會と思はれた。

品川妙國寺の法要 翌十六日御一周忌正當には午後
三時より 日生上人御住持寺であつた鳳凰山妙國寺に
於て追悼大法要が後住中川日史上人大導師のもとに
た。廣い妙國寺の本堂は満員となつて一同謹聴され
て居たが散會は十時であつた。

館林圓教寺新居師の奉悼

合掌 本月十六日 本多日生聖人の一周年忌に當
り謹んで 當寺に於て聖人の御尊靈を奉安し奉り
終日妙經誦唱題仕り御在世當時を深く思ひ奉り
つゝ御遺訓の體験に遙に尊墓を拜しつゝ精進仕る
べく誓願仕居候間當日上京出席仕らざる段不惡御
許容賜り度右失禮をも願みず御通知申上候
南無妙法蓮華經
三月十五日

二本松蓮華寺追悼會

月日の流れは早く、忘れがたき三月十六日は、吾等
の恩師聖應院日生上人の第一周忌の御命日の當日で
ある、我々福島縣二本松町に於ては信徒遊佐八重子
氏の發願に依り、有志信徒相會して、蓮華精舎に於
て午後一時より追悼會を舉行し、後茶話會を催し上
人の追憶に時を過ごし夕方散會せり。

盛大に虔修された。

導師の歎徳文 協賛會の報恩文はあつたが、そこには
本多上人第一の弟子顔たる井村日威師の姿が見え
ぬことは、何となく異様に物淋しく感ぜられた、吾
人はかの中山日頂上人の故事と對比して大なる衝動
を興へらるゝ。

御寶前の盛儀を卒へて有志の展墓は、又何となく悲
しみを新に増す、各自は其心を引締めて、御供養の
辨當とお菓子を戴いて夜間の追悼講演を待つもあり、
歸るもあつた。

定刻左記の順序で大講演會は開催された、

一、教化運動に於ける生師の功績

山主 中川日史師

二、時局の軍事的展望

海軍中將 佐藤鐵太郎閣下

三、馬賊の生活

作家 平山蘆江氏

其の内容は不日誌上に發表させて頂くであらうが、
中川師は勿論、佐藤中將に於かせられても今後は皆
一致協力して 日生上人の遺志を尊重し之を實踐す
ることに盡したいものであるとの希望抱負を漏され

……記事……

統一團協賛會々報

本會三月の主要行事は、同月上旬役員會に於て聖應
院日生上人御一周忌奉悼會を十五日御遠夜に、報恩
閣で相營むべく一決し、團員有志一同至誠奉行且つ
圖書寄贈を施したこと前掲の如くであります。

次に本會の財團法人申請手續は愈々本月
中に是非運ぶべく努力致して居ます。從來多額
の御寄附は種々の關係上、其の間際迄御差控への向
も伺はれましたから、甚だ失禮とは存じますが前述
の次第御賢察の上、刻下の財界甚だ申上兼ねます
が、偏に爲大法又爲皇國に何卒本月十日迄に可
及的御醸出 給はらんことを重ねてお願い申上げ
ます。

統一團法人組織に對する

寄附者芳名 (自二月十七日 至三月十六日)

- 一金貳拾圓也 千葉縣 小澤 元重殿(即納)
- 一金六拾圓也 東京 菊地 雄三殿(金參圓 即納)
- 一金貳拾四圓也 同 永井省三殿(第一回)
- 一金拾五圓也 仙臺 岩淵 經夫殿(第二回)
- 一金貳拾五圓也 (乙種) 名古屋 大八木義雄殿(同)
- 一金貳拾圓也 (正會員) 千葉縣 小澤 元重殿(同)
- 一金五圓也 東京府 小西 日喜殿(第一回)
- 一金貳拾圓也 東京 和田 たか殿(第二回)
- 一金拾貳圓也 同 鈴木破魔司殿(即納)
- 一金拾圓也 同 宮下きく子殿(第三回)
- 一金五圓也 同 八木シゲ子殿(同)
- 同 齋藤リイ殿(即納)

申込總計金貳萬壹千參百九拾壹圓四拾貳錢也
既收累計金五千九百五拾圓四拾貳錢也

教 戰

龍谷大學 雲山和上に對する質疑 (其二)

法橋 居士

要するに余經に於て他土の諸佛例令大日如來や藥師如來や又は阿彌陀如來等の功德や利益の尊さを説かれしは法華經を説かんが爲めの準備説法にして法華以前たるべきを信するも大過なからん畢竟末代興業の説法にあらず釋尊は此妙法を説くこそ出世の本懷なりとて

方便品に

「舍利弗云何名諸佛世尊唯此一大事因緣故出現於世諸佛世尊欲令衆生開佛知見使得清淨故出現於世欲示衆生佛知見故出現於世欲令衆生入佛知見道故出現於世舍利弗云々」
と垂示して其本意を明にし次で譬諭品に於て「今此三界皆是我有其中衆生悉是吾子而令此處多諸患難唯我一人能爲救護」と宣らせ給ひて三界の衆生を救護する者唯我一人の大宣言を如何に見るべし

や○此三界衆生を救護する者は唯我一人とは何故なりやそれは此土有縁の釋迦こそ(余經には未だ明さなかつたが)久遠劫來三身即一身の如來でありしが故にと

毒量品「自我得佛來所經諸劫數無量百千萬億載阿僧祇云々」と其本地を明かし給ひて妙法を演説し給ふや十方の諸佛皆來至聽聞す中にも多寶如來は塔中虚空に居して「善哉善哉釋迦牟尼佛快説是法華經我爲聽是經故」と四衆の前に發言し給ひし其儀式の莊嚴さと云ひ其發言の尊さ豈に他事ならん然るに觀經を拜するに

觀無量壽經「上品上生者若有衆生願生彼國者發三種心即便往生……生彼國已見佛身衆相具足見諸菩薩色相具足光明寶林演說妙法聞已即悟無生法忍云々」

「上品中生者不必受持讀誦方等經典善解義趣於第一義心不教 勤深信因果不謗大乘以此功德回向發願求生極樂國……修諸三昧經一小劫得無生樂國……」

「上品下生者亦信因果不謗大乘但發無上道心此功德回向願求生極樂國……聞衆音聲皆演妙法遊歷十方供養諸佛於諸佛前聞甚深法經三小劫得百法門門住觀喜地云々」

「中品上生者若有衆生受持五戒持八戒齋修行諸戒不造五逆無業過患以此善根回向願求生於西方極樂世界……聞衆音聲讚嘆四諦時即得阿羅漢道三明六通具八解脫」

以下五品は省略す

如上の通り觀經の利益は往生得道に九種の差別あり從て往生するも其後に於て妙法の演説を聞き上品中生者以下は戒行を守り相當劫數

の修行を爲さるべからず縱令往生を遂げても成佛は仲々容易の業にあらず然かも現世には他力本願の功徳によりて彌陀の淨土に往生するも其上は絕對自力の戒行に依らざれば成佛するを得ず

要するに眞宗の教義を觀經の文より見るときは娑婆の衆生は他力本願の功徳に依て彌陀の淨土に生れ其所に於て自力戒行を積みて其功徳に成佛する者と承知せらる

然るに法華にありては「每自作是念以何令衆生得入無上道速成就佛身」と説かせられ各人の佛性を今日唯今から勇猛精進して人格の完成を期せしめ即身成佛を目標とする宗門であります

以上は昭和六年九月十日雲山和上親下に發送したる質問書の概要にして是れに對し雲山和上より數千言の應答文がありまして是れを開示すべく公開の義を和上に願合せしも返信なきが故察するに請上公開を憚られたる者と信せらる。然る上は許可認容なき文章を公開する事は和上に對する道徳上よりして復た法規上より論じても認許なき他人の文章は公開し得ざるを以て遺憾ながら其文章は明示公開を差控へますから左様御承知を願ひます

附記 本質問書は二編より成り第一編は法橋の質問第二編は橋老師の派質問書なりしが質問の要點が同一にして内容に異なるものなきが故に其重複を排せんが爲めに二編を合して其要約を綴り経語等其大部分は橋師の文章を綴りたり

福島活動史

- 二月五日午後三時十六分駐滿兵交代として第二師團在仙部隊看護兵十三名二本松驛を通過東上せり因つて歡送す。
- 二月十七日夜 於蓮華寺 題目講
- 一、四種の婦人に就て 中島 元道師
- 二月十八日午前六時五十九分上海の戦艦にて戦死せる海軍水兵河東則市氏外二名の遺骨二本松驛を通過せり因つて讀經見送す。
- 二月廿五日廿六日廿七日廿八日廿九日迄動員令にて召集せられたる兵士二本松署管下五十餘名を停車場に歡送す。

誌料領收 (自二月二十一日 至三月二十一日)

一金貳圓貳拾錢也	橫濱	眞井	巖殿	一金參圓參拾錢也	福島	中村	美津殿
一金拾圓也	川崎	毛見春	吉殿	一金貳圓貳拾錢也	新潟縣	村山	智全殿
一金貳圓貳拾錢也	東京府	島龜太郎殿		一金貳圓貳拾錢也	濱松	三谷	芳一殿
一金貳拾壹錢也	名古屋	神谷榮之助殿		一金五圓也	大城	中崎	米殿
一金參圓也	東京	伊藤なほ殿		一金貳圓貳拾錢也	同	相馬	布佐衛殿
一金貳圓貳拾錢也	北海道	福士忠治殿		一金貳圓貳拾錢也	神戶	友廣	了少殿
一金壹圓貳拾錢也	西宮	山本小四郎殿		一金壹圓貳拾錢也	釜山	池田	金作殿
一金參圓也	東京	本郷常次郎殿		一金貳圓貳拾錢也	豊橋	田村	仙作殿
一金貳圓貳拾錢也	同	山路益三殿		一金六拾錢也	東京	森山	春吉殿
一金六拾錢也	名古屋	古市二郎殿		一金貳圓貳拾錢也	山形縣	坂部	利八殿
一金貳圓貳拾錢也	奈良縣	出口馬太郎殿		一金壹圓貳拾錢也	東京府	白井	勢市殿
一金貳圓貳拾錢也	東京	高田保太郎殿		一金貳圓也	同	沼部	彌太郎殿
一金壹圓五拾錢也	同	三須久三郎殿		一金壹圓貳拾錢也	東京	鈴木	教友殿
一金壹圓貳拾錢也	同	三宅たけ殿		一金壹圓六拾錢也	同	勝山	いし殿
一金四圓四拾錢也	同	市川謙太郎殿		一金壹圓也	同	遠山	いよ殿
一金四圓貳拾錢也	千葉縣	柳澤豊三郎殿		一金壹圓也	同	齋藤	い殿
一金參圓也	同	時友太助殿		一金貳圓貳拾錢也	同	土屋	謙子殿
一金貳圓貳拾錢也	福岡	山田良雄殿		一金貳圓貳拾錢也	同	宮中	こく殿
一金貳圓貳拾錢也	東京	西山吉五郎殿		一金貳圓貳拾錢也	同	福井	治昌殿
一金貳圓貳拾錢也	千葉縣	山田平八殿		一金貳圓也	同	竹内	太八郎殿
一金貳圓貳拾錢也	神戶	清水正藏殿		一金貳圓也	山形縣	遠藤	貞次郎殿
				一金參圓也	福井縣	岩本	利造殿

編輯室より

右難有入帳仕候也

「統一」會計

東京府	中原通	巖殿
東京	本岡	寧夫殿
同	松岡	銀次郎殿

御注意

- 一、團費、誌料は總て前金に願ひます
- 一、「前金切」御注意致し二ヶ月に及ぶも御持込なき場合は乍遺憾御送本見合はすことありませ
- 一、集金郵便は參與以上にて其取立には團費誌料の上に金拾錢の集金料を添加致します
- 一、御轉居の節は必ず新舊双方を御明記御通知下さい

○日生上人は教義のみで、信心の御利益は無關心で在られたやうに思つた人等は、今月の聖訓摘要を御精讀願ひたい。

○この所記事幅帳にて、日生上人の「法華經の信解」が二回休載となりましたことを甚だ遺憾とし、謹んで陳謝致します。

○本月は御周知の 大聖釋尊の御下生月、各方面で年毎に盛大な花まつりが営まれる。然るにそれが僅か一日丈けで直に忘れ果てる向もある、この方面も追々佛教と釋尊とは離さぬよう努めたい。「佛徒は須らく釋尊に還れ」とは、日生上人の畢生のお叫びでありました、二陣三陣と續いてほしい。

○何だかその邊で蝸角の争が演ぜられて居るやうだが、今や新建設の國家北滿には第一に正しい教化を要する。單稱日蓮、淨土、眞宗や眞言宗等それ機逸すべからずと滿蒙に其教線擴張策を講じてゐます。日生上人御在世ならばと愚痴る迄もなく、護法の士に決心を促して止まぬ。

○此の欄で甚だ恐縮ですが、本多上人の御遺族は、今度左記の通り御轉住遊ばしました。(省線大井町驛から東へ約二丁、府立第八女學校の西)

東京府下品川町南品川淺間台一五〇九番地



本多日生上人名著在庫品特價提供

- 一 聖 語 錄 改版
特 價 金壹圓八拾錢
送 料 共 金貳圓拾錢
- 一 日蓮主義本領
全 金貳圓拾錢
- 一 法華經要義
全 金貳圓五拾錢
- 一 日蓮主義心髓
全 金壹圓五拾錢
- 一 日蓮主義精要
全 金貳圓九拾錢

磯部滿事謹輯
一本多日生上人

特 價 金壹圓七拾錢
送 料 共

申込所

東京市外南品川妙國寺境内

「統一」發行所

振替東京五一〇七一番

一月「教」誌

定價一冊 金拾錢
送 料 共 金五厘
一ヶ年前金 金壹圓貳拾錢

申込所

東京市外南品川妙國寺境内

「教」發行所

振替東京一〇九四〇番

價定一統	
一冊	金貳拾錢
半ヶ年	金壹圓貳拾錢
一ヶ年	金貳圓貳拾錢
送料共	送料共
事之金前	事之金前

料告廣一統	
表紙一頁	金貳拾
一頁	金拾五
半頁	金九
四分一頁	金五
送料共	送料共
事之金前	事之金前

昭和七年三月廿四日印刷納本
昭和七年四月一日發行

(第四百四十五號)

不許複製

編輯兼 磯部滿事
發行人 磯部滿事
印刷所 東京府在原郡品川町南品川百八十二番地
電話高輪六〇二四番

發行所

統一發行所

編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ

目次

- 聖訓摘要……………日生上人
- 法華經の信解……………日生上人
- 滿蒙事變に對する將來の覺悟……………影佐禎昭
- 開顯統一と日生上人(坤)……………中村清一
- 記事
- 統一團協贊會々報
- 見聞錄
- 團費誌料領收

第三十七年五月號